

J. COLE

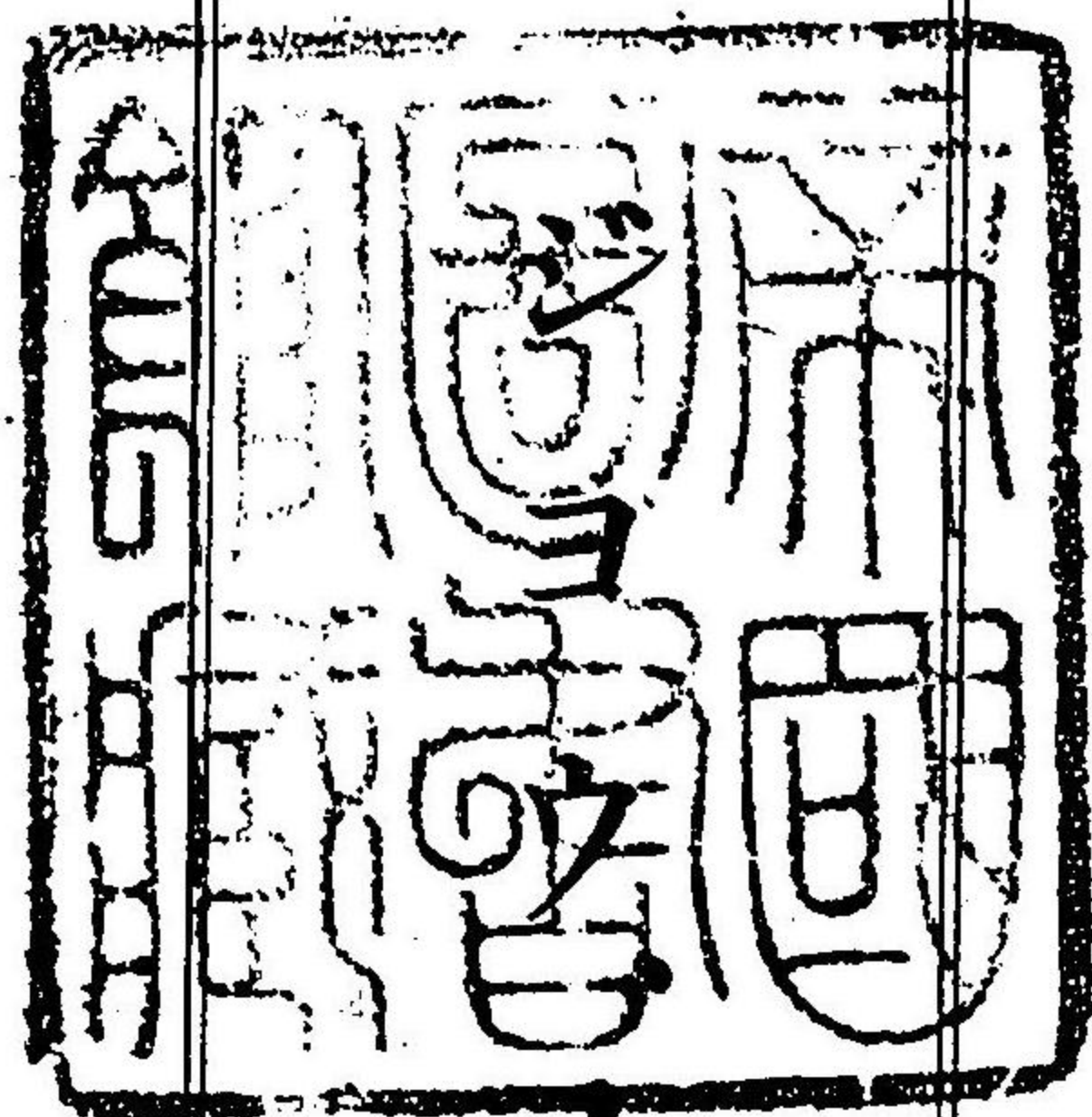
ペンマンの物語

258
3
289

4

特22

474



丹野房子譯

發行所 東京教文館

ールの話

明治
17 1 29
丙午

第一章

拜啓陳れは今般貴邸に於いて、給仕人として少年一名御入用の由、新聞の廣告にて承知仕が候就ては私儀はシヨウ、コールと呼び本年満十三才に成りました者に御座候へ共、御使ひ下さる候や奉伺上候。私の矢張り給仕を勤め居候兄が種々教へ呉れた爲め、皿やなんが器具を清潔に致すこと出来申候。窓のガラス靴なんかも美禮に磨くことを知り居候。何卒御使ひ下され度希望仕候。給料の義は金八圓下されば何も加も自分にて一切支拂ひ申すべく候。若貴邸にて私の衣服一式の洗濯代を出して下され候へば金七圓にて宜敷奉存候。私は十分萬事に注意し克く奉公致す積りに御座候。而して貴邸で善き者を置きあてたと御満足なさるやう希望仕候。何れ明日伺ひに參上致すべく候。

頓首再拜

シヨウ、コール

シヨウ、コール

令夫人様

二白、私は餘り背いは高くはなく候得共段々に大きく相成申候。兄は可成背いの高い人に御座候。私は可成ハシツコイ立ちには是あり候。若貴邸にて御言付けなされ候へば讀み書も加算も致すこと出来候。

私は少年給仕を一人召抱へたいと存じて、新聞紙の廣告欄に其由を掲出して貰ひました。すると其日直ぐに數十通の答書に接しましたが。何れも大同小異の讀辛ひ解し難い書狀許りで。最後に披見した一通が即ち以上に記載したもので、其れが全文の寫しなのです。半切半枚程に一字宛離して金釘流に書かれ、加之に墨汁の汚點が所々に附着いた此手紙は、儘に手製らしい不器用に狀袋に封入されて有りました。文面の様子では此少年は文字も文の綴り方も二つながら全然知らぬ者と言つても宜い位ゐるが、併し此の飾氣のない拙い手紙の面には何處となく可愛い率直の氣が灰見えて居て「兄は可成背いの高い人に御座候」と、自慢した可愛らしさ。亦た「洗濯代

を出して下され候へば、給料を減らさんと云ふ、仇氣ない文言には、私は思はず頗笑まれました。今歳僅か十三歳の背丈は高くはないが、萬事注意して奉公大事に勤めやうと言ふ少年、未だ年齒も往かぬに早くも浮世の荒海に投入れた可憐の渠は、抑も怎麼性質の者であらうか、私は考へながら此手紙を讀んで居りました中に、一度渠に會つて見度いと念と、不慥に思ふ情とが胸に浮び來ました。

私は書信の返書は悉く自分で認め、其他に猶種々の註文書なども一切自分に辨じなければならぬのでした。ですから若し算筆の心得ある給仕を抱へられるなら、其れは至極好都合なのでした。が「ハシツコイ立ちで」、「讀み書きも加算も致すこと出来候」と書いて寄越した此の少年に通信を任せることが出来るだらうか、少しく覺束ないやうである、なご、私は明放たれた窓際の椅子に腰を掛けて、少時這麼ことを考へて居りました。折柄突如に私の面前に黒い影法師が落ちたので、思はず顔を上げますと、其處に尋常外れた大きな碧眼の少年が立つて居りました。其

の服装は小瀟洒として、秩然と着なされては有りましたが、借衣でいもあるか、彼の身体の二ツ掛けもあらうかと思はる、程身巾の廣い、何處も彼處もダブ／＼したもので、宛然狼が衣を着たといふ鹽梅でした。

少年は赤い手巾で中結した包物を左の小脇に抱へ、右手には野生の草花の束ねたのを持つて居りました。が、炎天に遠い道程を歩行いて来たものと見え、花束は塵埃に塗れて早凋萎れかゝり、蕾は首を俛垂れ、花瓣は一片々々床に落ちつゝ、有りました。「お前様は何誰です？何爲に茲へお出でなのですか？」

と、私は少年に質ねました。

其時少年は萎れた花束を私の机の上に置いて、帽子を脱り、兩足一度に後部へ退らうとするやうな妙な態度に一二歩身を退つて、叮嚀に辭義をなし、而して私が吃驚りして思はず眼を睜つた程の太い音聲、實際其の小さな身体に不似合な、恰度着て居る衣服の大きさに相應しい音聲で、

「夫人、御免なして下さい。アノ、俺がシヨウ、コールと申す者なんです。何卒御邸でお使ひなして下さい。俺は其れで参りましたんです。アノ、衣服も他の品も大概一切持つて来たんです。」

彼が餘りに倭少いので、私は驚いて、這麼小兒が役に立つたらうか、是では逆も使へ切れまい、と、霎時打惑うて居りました。實際彼は餘りに小兒らしく見えました。が、その張りのある大きな眼には如何にも忠實らしい熱心らしい色が確に現れて居つたので、私は其れに興味を覚え、今少し明瞭に彼の様子を知り度いと思ひました。「お前さんは奉公するには些し年少過ぎますねえ。お前さんでは私が吩咐ける事を満足に辨じかねるだらうと思はれますよ。其れに亦たお前さんは私の方から抱へるとか、辭るとか、何れかの返事が達くまで宅に待つて、而して兎も角使つて試やうといふ返書であれば、其時始めて此邸へ御出でのが當然では有りませんか？」

「へえ、夫人、左様でいます。俺は餘り大きかないのです。」

と、少年は不安心さうに怖づく答へて、

「眞個に背丈は高い方ぢやないのです。けごも、夫人、俺の腕は随分長くて、可成高い場所まで達しますんです。其れに力も大分有ります。若し夫人が御覽なされば知れるんですが、親父が市場に荷を出す時に、俺は毎時でも品物の充満に入つてる大きな籠でも何物でもズン／＼指上げては車に積みましますんです。夫人、アノ俺が今日参りましたのを、どうぞを怒りなさらんやう願ひます。實はデック、俺の兄ですが、アノ、シヨウやお前、俺の言ふ通りに實行て見な。なあ、今から直ぐお邸へ行つて伺つて見るよ。愚圖々々して足許に草の生へねえやうに用心しな。俺は知つてるが、戶外を何時でも清潔にして置くてえことは随分大役で、些つとでも油断しやうもんなら、直ぐと雑多な物が散らかるもんだ。這麼ことも其れと同じで、油断して居ればサツサと他人に折角の奉公口を奪られて了ふからな。而して其れを奪られたのも知らずに、後からノ／＼出掛けて往つた處で「ア、

お前さん少し遅かつたよ。御氣毒だが俺が先口で既う極つたのです」と其奴から門前拂ひにされて了ふ許りだよ。其時お前は何う爲るね？だから、シヨウや是から往つて御質ねして見な、お前は敏捷さうに見えるしするから、或は使つて下さるかも知れないよ。」と、恚うデックが言ひますもんで、其れで今日押附けのやうですが、参じたのです。夫人、どうぞ不調法の所は御免なして下さい。」

「けれどね、當方ではお前さんが何處の御人だか、甚麼氣質の者で御出でだか、一切分りませんからね。誰人かお前さんの身元を引受けて、而してお前さんは正直で、是れ位の仕事は出来るとか、何とか、那麼ことを保證つて咄してお呉れの人が無くては詮様が有りません。私は毎時でも正直な善良者を雇きたいと心掛けて居ます。先達てまで居た給仕は誠に善良者で、以前に使はれて居た邸には三年間も無事に勤めて居たと云ふことで、安心して抱入たのでした。」

「アラ！」

と、シヨウは吃驚したやうな顔色して

「其少年は當邸様へ参じます前に三年も同一御邸に勤めて居たのですつて? 那麼に勤め好かつた御邸を、何故亦た暇を取つたもんでせう? 若し俺が當邸様へ三年も御奉公が出来れば、暇を頂いて、他のお邸へ行くなんてえことは致しません。其人は餘程妙な、何てえんでせう?!

其時 私 は奉公人の出替りは彼等が此邸には長く使はれたい、彼處の家は早く暇を乞い度いと、只單に自分等の随意で何れかに取極めるに限つたものではない。時には雇主の都合で、主人の方から暇を遣はすことも往々有ることだと説き聞かせました。

「たけご、若かしたら何事が爲たんかも知れない。其れで御主人が出しなされたのでせう? 阿呆な人だ!」

と、シヨウは獨語のやうに呟きました。

「マア、夫れは怎うでも宜いとして、肝心のお前さんの身元を調べるには何ういふ都合にしたら宜からうか? お前さんでは餘り倭少さ過ぎて、逆も間に合さうもないと思はれます。けれど、マア、兎に角當分使つて試て、其上で孰らかに極ることにするなら、何處へ問合したが一番克く分明るだらうか? 兄さんが勤めて御出での御家へ問合せたなら何誰か委細知らして下さるだらうかねえ?」

「え、詳細咄して下さいますとも」。

と、シヨウは叫んで双の頬を眞紅にしながら

「俺が其廢性質の少年だか、委皆り咄して下さるやうに屹度デックが皆様に願つて呉れませう。エデス様なんか、アノ、俺が其方の靴を度々磨いて上げました。一度なんか大變道路の泥濘つた日に御出掛けなして、靴をば泥ボツケにして歸つて來なしたんです。だけご又直ぐ出直して被行やるんで、犬を連れながら急々厩の方に入來して、デックやお前此の虎を暫く繋いで置いて下さい。其れから此子が

爲てお呉れなら鳥渡靴を磨いて貰い度いがね」と恚う御言ひなしたのです。其の穿いてらした靴は編上なんで、綺麗にするには随分手間が掛りますんです。けど俺は直ぐと一生懸命に磨いて上げたもんで、御嬢様は俺に六錢下さいました。爾來は朝に磨靴が出ますと、兄さんは小さいのは屹度俺に磨かさせたのでした。而して御嬢様の侍女が穢い黒い手を靴の中に差入れては否けないと言ひましたから、俺は注意けて、手は入れないやうにして磨いたのでした。若しエデス様に俺の様子を御質ね下したら、屹度委しく知らして下さいませう」。

折柄客の来て案内の鐘が鳴らされたので、一先シヨウを臺所へ退らせんと思ひ、恚う申しました。

「では亦た後刻に猶克く聞させませう。暫時階下で休息しながら待つて御出で。而して私が恚う言つたと料理人に咄して、何ぞ食品を貰つてお喰り」。

シヨウが室を去らうと致した時私は呼止めて、

「ア、ユール、茲にお前さんの持つてお出での草花が有りますよ。是れも一緒に彼方に持つてお出で」。

シヨウは其草花を私に興へやうとしたを今更耻しいと思ふ風情で、私の顔面を視め、而して掌の上に叮嚀に拾上げて、赤い手巾の一端で卓上に落散つた二三枚の葉と塵埃とを拭去りながら、

「此花瓶に挿して有やうな這麼美麗な花がお有りなさうとは知らなかつたもんで。ちやア花束はコックさんに上げやう」。

と、言譯らしく低聲に咳きました。

出行くシヨウと入替りに客人達は此室に這入つて來られ、其れより漸次に數人の友が來會されました。

天氣は晴朗に溫暖なので、明放たれた窓際の木影の冷しい塲所に陣取つて、四方八面の談話に打興じて居りました。暫くして客の一人が渴を訴へたので、私は氷入り

のレモナード、苺、クリームなど馳走致さうと申しました。がクリームに付いては内心些か掛念されるので其れは是迄にも一食品を使用しようといふ矢先、若生憎其品が切れて無く、爲に使人を走らせて、求めさせねばならん場合に其火急の使命に走行く少年の居らん時には差して必要でない奢侈の品は餘義なく省いて用ゐないことが屢々有りますからなので。今此時にも都合よくクリームが有れば宜いと思つて居りました。

が兎も角私は呼鈴を鳴して侍女を呼びましたメリーといふ小間使が這入つて参りました。此女子は召使仲間から「一人で働く」と言ふ可笑な綽名を與へられた者で。が此の妙な綽名を貰つてから彼女は大方性癖を慎しむやうになりました。で私は直ぐに彼女に吩咐けました。

「メリーや、氷を入れたレモナードを作らへて持つて御出で、夫れから料理人に大急ぎに苺を摘採で、クリームを一緒に持つて来るやうに左様言つてお呉れ」

「サア、誰人が其御用を悉皆致すのでういませう！少々お手間が取れますから、ごうぞ少時お待ち遊ばして」

確に左様言ひ度いやうな顔色で、メリーは私の顔面を疑つと瞞めました。メリーの言ふまでもなし多少の時間は無論待たねばなりません。其れは最初から承知して居つたこと、其待間の時間ふさぎには猶少時を雑談に過し、餘刻は音楽に費さんものと、私は潜に目算して居りました。處が豈圖らんやもの、十五分と経過の間に早くもメリーは吩咐られた品々を悉皆用意して盆に乗せて持つて参りました。私は意外の早さに吃驚り致すと、同時に又苺にも直ぐ眼が付きました。其れは實に美事で、立派で、卓上の粧飾法として最も珍らしい形状に飾られて有りました。慥に熟練した手で飾つたものと思はれました。が、何人が這麼に美しく飾つたのであらう？メリーは事物に疎い人で、食物、皿、小刀、肉刺、コップ、薬味器、などが卓上に揃へば其れで事足れりと思ひ、中央に置く花瓶などは吩咐けられぬ限りは決して持つ

て来ません。殊に「一人で働く」とてふ綽名を呼ばれて居た頃には吩咐けてさへ容易に持つて来ず、幾度か催促しなければならなかつたのでした。

莓の器に准高く盛上げられたのは、何の粧飾の施されなくとも、莓夫れ自らで既に美しいので。が、是れは亦た何たる美しさであらう！雪を欺く眞白の滋器の腰高鉢に莓は山の如く積上げられ、其容器の腰の邊りには切咲きの朝顔花が纏ひ付けられて、美しい空色の花瓣は白き筒を差伸べて、辛くも鉢の邊端を覗きながら、累々たる眞紅の甘味き果實の側に静に休息して居るので。其状態の可憐なる、其色彩の華麗なる、眞に目も醒る許り、美しども愛らしども賞むべき言辭がない位でした。クリムも同じ純白の器に盛られて、是れにも其周邊に同種花が至つて面白く結付けられ、而して亦たレモナードを入れた玻璃の壺には黄金色の可愛らしい花輪が嵌められて有りました。

「オ、是れあ美事だ！マア何といふ美しいのでムいませう！」

とは異口同音に叫ばれた客人達の賛辭で。

「何うした妖怪が這麼美しい物を見せて吾等の眼を喜ばせ、同時に美に憧る、情念をも満足さして呉れたのであらう！」

私は多分是れは料理人の友か、或はメリーの知人かの誰人が粧飾法を習得つて、而して今其標本を私共に示せて呉れたのであらうか、と想像して居りました。

斯くて來客一同は歡を盡して歸去られました。私はシヨウ、コールが雇入れを謝絶される爲に待つて居つたを思出して、直ぐ彼を呼びました。

料理人ウイルソン妻女は「エヘン」と咳拂ひに先を打たして此室に這入つて参りました。其先觸には以下の如き意味が含まれて居りました。

「アノ、夫人、私は少々考へましたことがムいますんですが……、誠に大膽れたことで濟みませんが、其考量を鳥渡申上げて見度いと存じます。若し夫人が失禮を御赦し下さいますなら、夫れは唯今お臺所で御返事を待つて居る子供のことなの

でムいますか……」アノ、夫人は實際彼の少年を使つて見やうと思召して被居いますのでムいますか？」
 ウイルソンが恚う申しましたので、私は反問いたしました。
 「何故お前さんは那麼ことをお質ねなの？」
 ウイルソンは笑を忍んで、

「でも、夫人。其れ勿論自分の爲を計つて兎や角と申上るのではムいません。が、唯だ彼の子の爲に一言申上げますので。夫人も御承知の通り御當家では是迄随分大勢の人を御召抱へになりました。ですから、夫人。マア、只今待つて居ります少年程清潔好で敏捷者は未だ一人もムいません。と私は存じます。先刻メリーがレモナードや、莓やなどの御用を承つて退つて参つた、其折の状態を、若し夫人が御覽遊ばしたならと、私は存じます。メリーは自分一人で其支度を致さねばならないといふので、夫れは不機嫌の顔色してノソノソと臺所へ這入

つて参りまして、其れから例の十八番の疝癪を起し、叱言たらしく品物に當り散して御用を爲始めたのでムいます。で、餘りですから、私が「メリーさん随分とお静にお働きたねえ」と申したのでムいます。其時彼少年はパンや牛乳など種々御馳走を大層喜んで頂戴致したのでムいます。で、私がメリーに斯様申しますと、彼少年は直ぐに御馳走を其儘に擱いて起上つたのです。其折の彼少年の様子を夫人に御覽に入れ度いと存じます位で、「サア其井をお貸しなさいませ。私が美しいレモナードを拵へて上げませう。デック兄さんが御主人の御宅で度々拵へたのを見ました。壓搾品を此方へ御出しなさい。ア、些時待つて下さい。手を洗つて來ますから」と彼少年は言ひながら、流板元に走つて往つて、手を清潔に洗ひ、其れから直ぐ戻つて参つて「眞白な砂糖がお有りませうか？アノ雪のやうに綺麗に拵へ度いのですから」と然う申しますんで、彼少年の前に入用の品々を揃へて出して遣りました。すると直様レモナードを拵へ始めました。が、其の手早

いこと、申したら、眞個にメリーなら、未だ只僅一個のレモンすら壓搾り切れま
 いと思ふ程の短時の間に既う立派なレモナードを拵へ上げて了ひました。其れか
 ら今度は「アノ御當邸では何處の店でクリームを御買えなさいますお前さんが莓
 を採集つて御出でなさる間にチヨックラ駈けて往つて買つて來ませう」と申すの
 で、未だ來た許りの見ず知らずの者に金子を持たして使命に遣るといふ
 は正しいことではないかも知れませんが、けれど餘り彼少年が手早いので、私はッ
 イ斷れないで金子を渡しました。で彼少年は壺を持つて駈出しました。而して私が
 裏場から莓を採集つて臺所へ戻つて來ました時には、既う其處に歸つて居て、頻
 りと花で食器の周圍を美しく飾つて居りましたのです。で私の顔面を見ると直ぐ
 に他人の用事に手を出して身分の好勝手な眞似をして濟まないが宥して下さい、
 と、詫ひますのです。「這麼差出たことをして濟みません。どうぞ御勘辨なして下
 さい。アノ牛乳屋の妻女さんが花を買つてつた方が宜いと言ふもんで、ツイ買つ

て來ました。デック兄さんが勤めてる御邸の給仕さんは毎時這麼狀に花で飾りま
 すが、美しくて宜いやうです。クリームの代價け俺が自分の金子から拂ひました。
 俺の誕生日に兄さんが小遣錢を少し呉れましたので、持合せが有りましたから。
 ……アノ、料理人さん、どうか夫人が私を御使ひ下されば眞個に有難いので
 すが、ねえ。俺充分注意けて御奉公する積りで居ますのです」とと慥う申して、頓
 て可哀想にシク／＼泣出したので、未だ。彼少年は何方へか奉公住を致さうと
 諸所探して居つたのださうで。而して先刻頂戴させて遣りました那麼結構な食品
 は喰へたことも飲みましたこともないと申しますのです。一日中彼方此方駆け歩
 行いて飢も疲れもしたに臺所が熱過ぎたので少々氣分が悪くなりましたのか、少
 し何品ぞ呉れろと申しましたので頂かして遣りましたので、何しろ不愜
 な少年で……。其れから唯今案内の鐘が鳴りまして、身体の大きい少年が二人參
 つて、何卒使つて頂き度いと申しましたのです。すると彼少年が「後生ですから、

既う給仕人は極つたと言つて断つて下さい。ねえ、お願いです。而してどうぞ夫人に俺を使つて下さるやうにお願ひして下さいと泣きながら頼みますのです。其故彼少年の依頼を一應夫人に申上げに出ましたので。何處となく誠に可愛らしい子で、而して仲々氣働きのある伶俐な子だと私は慥に左様思ひますのでお願いです。

ウイルソンは恚う言つて引退りました。入替つてシヨウは涙に眼を光らせながら這入つて参りました。其の哀れな小さな手は上衣の袖を緊乎と握り、足はブル／＼震へて什麼運命が自分の上に落ち來ることかと、如何にも心配に堪へぬといふ様子で、今の先迄ウイルソンが立つて居りました同じ場所に立ちました。其態度の如何にも可憐いので、私は渠の切なる願を謝絶つて苦ませるに忍びませんでした。

一ではシヨウは恚う爲ませう。お前さんで間に合ふか怎うか兎も角一月程召使つて驗して見る積りにして、是から直ぐお前さんの兄さんの勤めて御出でのお邸へ、

手紙を出して問合して見ませう。夫れで其處の御主人からお前さんは善良者だと言つて寄越して下さつたら、抱へることに取極めませう。

「オ、！、御使ひなして試して下さいませう。有難うございます。では唯今から御厄介様になりましても御差支は無いませんか夫人からの御手紙の其の御返事が來ないうちから御當邸に置いて頂けませうか？アノ當邸様には走り使など致すやうな少年は只今御抱へになつて居らん御様子ですし、夫れに料理人さんもメリーさんも大分御忙しいやうですから、即刻から置いて下さいませなら多少御手傳も出來やうかと思ひます。ですけれど夫人が御返事の來ない中は不安心だから邸に置くことは御嫌厭だと思召すなら、アノ俺は厭に寢泊り致しても構ひませんでいます。」

「いゝえ、シヨウ、お前さんは或は正直な善良少年でないかも知れません。けれど私はマア善良者と思ひます。だから即刻から當邸に居つて差支は有りません。さあ最う宜いから臺所へ退つて飲半の牛乳をお飲み、そして尙だ喰べられるなら尙

多何品ぞ貰つてお喰へなさい。夫れから少時休息して、行水でも浴び、そして今晩夕食の時に御給仕が出来るか一つ験して見ることに爲ませう。

「夫人、御親切様に有難うございます。俺は屹度御用大切に何事なりとも骨を惜まらず働きます。」

シヨウは心から嬉しう言つて急々と室を出て行きました。唯今まで怎うかと案じて居た重荷が辛々と下されたので、如何にも嬉しさに堪へぬといふ様子が顯然と見えて居りました。

私は再び此室に一人となつたので、唯今の處置に付いて靜に黙考ますと何うやら賢からの處置を爲て退けたと思ふ念がムラムラと胸中に湧いて來ました。折柄生憎良人は所用の爲め旅行中で、一兩月程留守でしたから、良人に相談することも出來ず、他に渠を召抱へることに付いて其良否さへ言つて呉れるやうな人も何誰も居ませんので、何うしても自分一個の所存で決定ねばならなかつたのでした。私の良

心は「若良人が居れば屹度恚う言はれませう。私供は彼少年の素性も知らず、何處に何う住んで、父母同胞は何人であるやら、眞個に渠に付いては一切知らないのだ。渠は或は自分等が考へて居る處とは全然相違して盜賊の仲間であるかも知られない。だから渠の性格と系類などの判明する迄は信用して邸内に宿泊させることは暫時見合せた方が得策であらう」と頻りに私に細語くのでした。

良心が斯く耳語のは正當のことで有つたのでせう。けれど其良心の耳語か自己の情意に全く反對して居る場合には人は往々其注告に耳を貸さぬことが有るものです。

シヨウは遂に邸内に止りました。頓て晚餐の刻限が參りました。私は一人淋しい食事を取る爲に食堂に這入りました。時にシヨウは以前の給仕が用ゐた役服を着て、顔面や頭髮は石鹼もて光る迄に洗ひ潔め、其縮毛をば額の邊りから美しく左右に分けて、而して其處に早くも私を待受けて居りました。此役服は以前の給仕人に仕着せたのを、渠が暇を乞ふた時に残し置いたので、其れを今シヨウの切なる願に、

メリーが取出して渠に着せたのでした。此役服はシヨウの身体には巾も廣く、丈も長いので、シヨウは縫ひ縮められる箇所は自分で巧みに縫ひ縮め、胸の邊りには枯草を充満に填めてチャケットの巾丈に膨脹させました。處が少時して枯草の香氣に人々が其れと知つたので、一同思はず大笑ひに笑ひ轉けたといふことを、後にメリーから聞きました。シヨウは非常に華麗な色彩を好く見え、太いズボンの上には眞紅の靴下を穿いて其のダブ付くを拒き、上衣の袖は自慢の長い腕には稍々短いので、活々した空色フランクネルの襯衣の袖を袖口にフカせて居りました。

私は一人で食事を致すので、這渠可笑氣な者を側に侍らせて給仕を爲せられました。渠の如何にも眞面目な顔面と滑稽極まる其服裝とは誠に面白い對照なので、私は我知らず默笑を禁じ得ませんでした。が亦た其眞面目な眼が眞向に私に注がれて有つた時には、自然に忽ち嚴肅にならずには居られませんでした。

シヨウの給仕振には申分がなかつたとは言はれません。勿論私が望む品は目敏く認

識て直に取つて渡して呉れました。が何しろ戰場には初陣のことゝて、未だ場慣れの憂慮と、其の任務を自分に教示る機会をメリーに與へなかつたので、渠が皿を取りにと椀厨に急ぐ時、一度ならず再三メリーに衝突り、又は持參した皿を遠くから、而も間違つた方向から度々差出すなどの粗忽が演ぜられました。其長き腕は身体はまだ適當の場所に来ないうちに早くも私の側に達くのでした。其れから私が水をと命じました時に、シヨウは恰度麥酒か何か泡立たせる飲料でも注ぐやうに高い所からコップに注いだので、アハヤ、メリーは一騒動を起す處でした。彼女は耐へかねてシヨウを睨付けながら低聲に怒鳴つたのを私は聴きました。

「お前さん何を爲るんだい、其れが水の注ぎやうですか？其れや御酒ぢやアないよ。馬鹿らしい！眞個に間拔だねえ！」

シヨウはハツとして顔色は見る／＼眞赤になり、而して心の苦悶、隠さうとてか皿覆の布巾を握んだ儘、慌て、食堂の外に出て行きました。が間もなく再び茲に這入

つて來ました時には此一家の給仕は自分が重き責任を負つて一切引受けて立つのだと言つたかの様な頗る嚴格な顔色をして其色も蒼白く見えて居りました。

シヨウは至つて温和な敏捷い勤勉な少年でした。が食堂給仕は渠には全く新しい職務で、殊に皿を取換へる一事は別けても恐しい業で有つたと私は認めました。而して其職務の半分はメリーの仕事で有つたに、シヨウは其れをも自分に引受けて手早く取扱ひましたが、其進退の如何にも敏捷なものには私は大に快く思ひました。斯くて食器は漸次に撤せられ、食卓には僅に一枚の大皿と小皿と而已が残り、私が最後に一片を口に致した時、シヨウは徐々と進寄つて、私が食し終るや否やメリーが其小皿に手を出す前に手早く其れを退いて、徐かに椀厨に持ち行き、メリーが大皿を片付ければ、自分は鏡を眺めながら緩る小刀、肉刺などを納めるのでした。渠は私に心竊に危んで居つた程の不調法も仕出さず、以上述べた粗忽の他には何等の過失をも爲ませなんだは私の嬉しく思ふ處で有りました。最後に渠は食卓を掃き潔め、

一揮して食堂の戸を閉ぢ、厨に退きました。其時私は何うしても渠の爲に何とか盡して遣らねばならぬやうな氣がして、思はず其性質の善良で有つて呉れよと心中に默禱致しました。

第二章

翌朝の食卓の上は、中央には美しき種々の花の挿けられた花瓶が置かれ、側の小さき皿には美事な薔薇の花と薔とが載せられて誠に華かに飾られて有りました。是等の花は勿論私に何事も語りません。が併しシヨウが私の給仕人に抱へられ度いと願ふ切なる心を代表して、黙々の中に私の興味に其思念を訴へて餘りあるのです。頼て其處にシヨウ自身が顯はれました。渠は即刻まで庭園に出て一時間餘りも自分の任意に好める仕事を爲て居たので、顔色は如何にも活々と愉快氣に見えました。私は此時渠も慥に家内の一人であると認めました。何故とやら宅にボギーと名

付けた小さな獵犬が居りました。此犬は何時でも見知らぬ人には直ぐ牙を剝いて吠懸るので、中にも少年には先天的に自分の仇とでも心得て居るかのやうに劇しく吠立て、咬付くのでした。處が此朝は珍らしくもボギーは未だ馴染もないシヨウの足許に絡つて、共に遊んで呉れよとの風情で、頻りに飛跳ねて居りました。猶亦た只にボギー斗りでなく年頃飼育てた鵓までが同様に親しげにシヨウの肩先に止つて居たからでした。

「お早う。シヨウ、お前は太層早起きだねえ！既う庭園に出て種々仕事をお爲だね。」シヨウは些つと顔色を紅くしながら、帽子の縁に軽く手をかけて、

「へえ。私は早起の習慣が付いて居りますんで……。アノ吾家ぢや朝早く種々爲る仕事、事、随分と忙敷いもんですから。毎朝大抵七時に兄と一緒に掛けます。事です。で其前に阿爺の手傳を爲なきやあならんので、怎うしても早く起きなければ間に合ひませんのです。夫れに加に兄の行く御邸は可成遠方で、マア小一里

は大丈夫御座いますんで……。アノ夫人、最う御飯を持つて参りませうか？メリーさんが私の爲ます御用を話して呉れました。」

私は持つて来よと言ひましたので、シヨウは臺所に退いて其支度に取り掛り、此度は何人の手も借らずに朝食に要る凡ての食品器具を一切取揃へ、大盆に載せて食堂に持つて参りました。其時私は彼の矮少き身体には其荷の重きに過ぎて、今にも落しはせずやと、思はず胸を跳らせました。が彼は無事に盆を側の椀厨の上に載せ得る技量を十分持つて居りました。けれど呼難關は終にシヨウの身に迫つて参りました。可隣のシヨウは膳拵へも給仕の仕方も未だ一向に心得て居りませんでした。食品の置場所を辨へなかつた物も二三種に止りません。珈琲土瓶さへ主人の前に供へ置くものか、或は食卓の一端に置いて、自分が茶碗に注いで主人に捧ぐるものか、是れすら知らぬと見え、渠は土瓶を手にした儘其處置に思ひ惑ふて、霎時茫然と考へながら其處に立縮んで了ひました。

頓て私は渠が愛慮の餘り次第に神經が昂つて、五體がわな／＼と顫へて來たのに心付きました。で其神經を鎮めさせる爲に私は慙う申しました。

「シヨウ、お前は私のお給仕は始めてだから、分らないのも無理もなからう。だから今何所には何々品を置き、而して怎うして狀にお給仕を仕て貰ひたいか、其仕方を茲で一度私が爲て見せて上げやうの人には其れ／＼好き嫌ひが有るもんで、従つて其仕方も多少違つて居やうからね。多分其方がお前の爲に宜からう。だが只僅一度限りですよ。お前は私の爲る處を能く見て居て、此次から其通りて爲てお呉れなら宜からう。ねえ、シヨウ、左様ぢやあないか。」

其處で私は大皿、小皿何れも夫れ／＼適當の位置に排べ直して叮嚀に教へて遣り、而してシヨウの大きな眼は仔細に私の爲る處を凝視めて居りました。斯くして後漸く食卓に向ひましたが、恰度私の顔面の邊りに太陽の光線が射入りますので私は少しく窓掛を引下して欲しいと思ひながら、此時始めて這麼矮少な給仕を召使ふのは餘

程損であると氣が付きました。シヨウは私の羞明氣なのを認めて、窓掛の紐を捕へやうと試みました。が悲しひかな背丈が達きません。渠は伸せる限り自慢の長い腕を伸して、以前の給仕の服の袖口が肱の邊りに迄來ました程でしたが、是れでも駄目でした。私はシヨウが怎うするであらうと好奇の眼を以て黙つて彼の詮様を見て居りました。シヨウは終に、

「夫人、何とも申兼ますことですか、彼處の椅子を持つて參つて、其れに乗つて窓掛を下ろしても宜しうムいますか？背丈が矮少いので怎うしても總までも手が達きません。明日からは恁麼に高く引上げないやうに注意けます。」

私は諾と許しましたので、椅子は食卓と支那磁器の花瓶との間を深く注意されて徐に引行かれました。シヨウは椅子に上り足を瓜立て、稍く目的を遂げました。私は此折にシヨウが眞紅の靴下を穿いて居つたに心付いたのでしたが、後日此靴下が私共に甚麼に惡感を與へたであらうとは、神ならぬ身の此時には夢にも思ひ寄ら

なかつたのでした。

此夕私はシヨウに付いて満足な報知を得ました。渠は次第に家事にも慣れ、家内の人々とも稍く馴染んで来ました。彼の物言の可愛らしげなものと、至極正直なること、非常な清潔好とが頗る奴婢仲間に歓迎されました。一体家事取締りのウイルソン妻女が少しく権力を振り過ぎるので、一同は何となく互ひに打解けぬ様子で、自然馴染も多少薄いやうに見受けられたにも拘らず、シヨウ斗りは何人にも氣に入られ可愛がられました。

今は一日の用事も終へ、夕食も済し、全く閑散の身體となつた召使共は一同臺所に集つて、罪なき談話に笑ひさざめて居りました。樂しげな笑聲は其處の窓から庭を通ふて私の室にまで聞えました。

シヨウが自分の兄デックが會て言つた言辭や、又爲た事やなど其の小さき記憶に残つて居る限りを愉快氣に物語るを、一同は手仕事を爲ながら耳を貸して、頻りに打

興じて居たのでした

兄のデックは此地上で確にシヨウに崇拜されて居る一人で、渠に約束された事は正しい義務として必ず守られたのであります。

「ウイルソンさん、あなたは兄さんを御知んなさらないが。けれど、マア、假令俺が火の中へ自分の手を突込んで焚いてもですなえ、一度兄さんが爲るなよと言つたことは、手を焼いたからつて、怎うしたからつて俺は二度と其事は決して爲ません。何故爲ないといふ理由は若あなたがデックは甚麼男だかといふことが御解りなされぬ、直ぐとお分りになります。俺が未だズツと幼少ちやつた時分、一度恚う云ふことが有りました。或時阿爺が市場へ果實類を持出すんで、俺は其荷拵への手傳を爲ながら、荷の中の杏を一個採つて喰べちやつたのでした。甚麼心で杏を盗つたのか、自分ながら今だに分らないんですかね。何しろ杏は鶏の玉子位の大きさで、少し蒼味かゝつた黄色い美事なものでした。阿爺は果實が擦れ

たり花が落ちたりするのが大嫌ひで、「木の葉で叮嚀に悉皆り包むのだよ」と毎時でも八釜敷言はれるのでした。現今でも記憶で居ますが、其日は大變暑かつたのに、俺は朝の四時から屈み通して一生懸命に其籠を包んで居たもんで、随分と疲勞れちやたんです。スルと何うした拍子かに包んでる手が杏に觸接つたのでした。處が小母さん、其杏が如何にも美麗で涼しさうで、加之に汗氣も澤山のやうなので、何うにも美味さうに見えて詮様がなかつたのでした。で俺は何うしてか其れを喰べなくちやならんやうな氣がして、到頭喰へちまつたんです。其杏は一小技に都合六個生つて居たのでしたが、一個喰べたので其所んどこに間隙が出来て、其處が直に阿爺に見付りさうなので、是れは一層悉皆喰べて技を捨てちやつた方が却て見付からないかも知れない、と左様思つたもんで、到頭一個残らず喰べて、技は側へ投棄ちやたのでした。其處へ恰度阿爺が遣つて来て、「其技附が何本有るか念の爲め鳥渡勘定して見て呉んな。四十本要るのだから。一粒選の大果の奴が二

十本、其奴はモセスさんへ達けるんで。尋常の塊つて生つてるのが矢張り二十本で、其の方はマルクさんの家へ遣るんだからな、間違はねえやうに爲て呉んな」と恚う言つたんです。此の二軒は宅の大切の得意なんでした。で兄さんが「諾し来た」と直様勘定し始めたのでした。處が無論一技不足なんでせう。兄さんは「三十九」と言つた限り後がないんで、其邊を見巡して、「ヤ、茲に枝斗り捨てゝある」と叫びました。俺は其時側に立つて居たんでしたが、何うしたら善いだらうと最う恐怖くて、恐怖くて、兄さんが勘定する前に一技俺が喰べちまつたのだとツイ白状して了ひたかつたのでしたが、左様思ひながら恚うしても口に出なかつたのです。で勘定されてからは猶更言へなくなつちまつたんでした。其時兄さんが「ジヨウや茲へ來な。何うして此小枝ばかり別になつた茲に在るのだらう？小枝は新芽の枝ぢやあないから儘に果實が結つてたんだよ。サア隠さないで有体に言つて了いな」と恚う俺に言はれるのでした。ねえ小母さん、俺は其時兄さんの顔面を

見たのでした。然うしたら兄さんの眼の光が一直線に俺の胸の中に射込んで心の底から眞個のことを引出さうとして居るやうに見えたのです。で兄さんは少し怒つたやうな聲音で、「サア早く正直に言つて了ひな。若お前が食つて了つたのなら、左様なら然うと白状して、而して罰として俺に打たれて了ひな。けど若お前が嘘言を吐けば生涯忘れることの出来ぬえ程苛酷く擲られるよ。だから正直に早く言つて了ひな。俺が喰へちやつて悪かつたと言詫つて、軽く擲られて了ひ。夫れども又眞個にお前でないなら誰人が盗つたか其人を言ひな。お前が是れを包んでたのだから、誰人が盗つたか知らん筈は慥に無いからね。」と憊う言つたんです。ねわ、小母さん俺は何う爲ることも出来なかつたんで、唯ぎ俛首いて、「兄さん御免なさい。俺が喰へたし……と言つて、ワツと泣出しちやたんでした。兄さんは「お前が喰へたんだ！矢つ張り左様なのか。眞個に卑ん坊だな！けれど、まあ、嘘言を吐かなかつたのが何寄りだ。サア、では罰として擲られて了ひな。だが先

へまあ手を出した。而して俺が今お前に言つて聞かせることを能く心に留めて記憶して居な。如何なる過失も既に犯したる以上は唯明白に白状せよ」とね。此事をお忘れでない。悪いことをしたら決して嘘言を言つて過失を飾つてはならない、唯眞直に白状して其罰を受けちまいな。それあ、罰を受けることは無論辛いには極つて居る。極つては居るが、其れでも罰を受けて了へば後は忘れられる。けど若お前が罰から免れやうと思つて嘘言を言つて見な。お前は自分の心に責を受けて、其事を思ひ出す度毎に、自分で恥敷つて生涯決して忘れることは出来ないのだよ。」と言つて聞かして呉れました。其れから兄さんに打たれました。随分痛かつたんでしたが、俺は耐へて泣きも叫びもせませんでした。ウイルソンさん其時若も俺が嘘言を吐いたなら、俺は最う兄さんの顔を見られなかつたでせう。其れで俺は何卒一生決して嘘言を吐くまいと願つて居ますんです。まあ、一度兄さんを見て御覽なさい。それあ眞個に正直な善良者なんです。」

「主は此少年の上に大なる恩恵を降し玉はん」と小間使のメリーは言ひました。

「オヤ、此少年は可笑いね！泣いてるぢやないか！怎うしたてえの？お前さん即刻まで面白いことを言つて、散々一同を笑はして置きながら、今度は自分が大きな眼から那麼に涙を溢してさ。怎うお爲だよ？まあ、少し戸外に出て、犬に餌でも與つて御覽な。然うしたら氣が晴れて、復た紅い活々した顔色して屋内に這入つて來られるかも知れないよ。」

シヨウは戸外に出て行つたが、間もなく犬共に餌を與り始めた見え、彼等の狂氣のやうな、吠聲が既の方に聞えました。時間は刻々と経過して、屋内は閑りと静寂でした。最愛の良人は亞米利加へ旅行中の留守で、友達は大陸や海岸やなごにて夏期を楽しく過ごされつ、晩秋の頃迄は一同思ひの土地に別れに生活されるのでした。冬期は私共は倫敦の山手の邸にて送るので、其時には私の親愛の姉が姪共

をも共に連れて邸に來られ、其冬中逗留されんことを、此折しも頻りに願ひつゝ有つたのでした。が何寄りも望まじきは良人の歸宅されんことでした。家族打揃うて生活す斗り愉快のことは有りませんので。

シヨウは日一日と次第に一同から可愛がられました。唯だ一つの心配はその背丈の餘りに矮少いことでしたが、其の性質の善良のが、一同の愛を牽いて困難の場合には何時でも快く助けて貰へるのです。渠は高い所の要事の爲に、自分で種々の踏臺を幾個も造へ、是れに上つても猶達かぬ所の物品には長い棒の先端を鳥の爪のやうな格好にして、其れに引掛けて目的を達して居りました。が其の却々の巧者には全く驚かされました。

シヨウは未だ倫敦の地を踏んだことがないと、私に咄しました。で私が冬期は其處で生活すのだと、幾度が告げましたが、シヨウは一向に氣乗のしない様子で、些も樂に爲て居らんやうでした。彼の兄デックは父に連れられて、一度倫敦に行つて、

種々珍しい物事を見て来たのださうですが、其中に或る非常な悲酸の出来事に出遇つて、心に深い印象を興へられて歸つて来たのでした。で歸宅後シヨウに其事件を話して聞かせたので、シヨウも亦た其事件が心に刻み付けられたものと見えませんでした。

其理由はまあ恚うなんせう。一晚デックが父と共にウォーター橋の袂を通行しました時、一人の若き娘が泣きながら二人の傍を走り抜けて、橋の上に一散に駆けて行きました。が其様子が何となく怪しげなので、デックは直様後から追絶つて、その悲哀の事由を質ねたのでした。彼女は未だ年齒もゆかぬ小娘でしたが、早くも辛き浮世の苦勞を覺えて、小さき心は遺瀨ない憂患に閉られ、孤兒の悲しさには便り行かんと思ふ親戚もなく、然りとて何一物持たぬ身は生計の途を得る術もなく、進退茲に窮つて、今は是までと覺悟を定の此河に身を沈めんと、偕こそ此處に走り来たのでした。彼女はデックの尋問に對して唯一言「どうぞ此儘に見逃して」と而

已で、後は涙に咽せんで居りましたがデック父子が親切に勞つて、種々に宥め諭し、稍くに聞き得た彼女の悲哀の源因は恚うなのでした。

彼女の双親は一年一航海の途中で難船して、彼女と弟との兩兒を残して共に溺死したので、其以來彼女は健げにも亡き父母に代つて自分の手一つに弟を養育したのでした。彼女は帽子や頭髮の粧飾品を製作することを習ひ、其職を以て人に雇はれ、懸命に働いて僅に得た給料から、他人の家屋の狭き二室を借受けて一室は自分の居間に他は弟の寢室として渠に貸與へ、猶其上に彼の衣食一切をも悉く細き腕に引受けて世話して居りました。けれど健けな姉に引替へて、弟は無懶の性質で、姉の千辛万苦の心盡しを露有難しと思ふ氣色もなくて、朝から晩まで懐手しつゝ遊び暮し、大恩ある姉の教訓を用ゐぬ斗りか、時に少しく其放埒を戒められ、或は不良仲間を家に伴れ来るを禁められもせば、無法にも姉を罵り、打つやら蹴るやら有らん限りの暴行を働いて責め苛むのでした。斯くて渠の亂行は日一日と募つて、一夜遂に姉

の所持品を殆ど一物をも残さぬまでに持出し、悉皆質店に典じて了ひました。其品物の中には姉が注文主から見本として預つて居た帽子も幾種か有つたので、爲に姉は雇主から職を解れた而已か、其損害をも辨償させられたので、僅に取残された衣類道具をも賣り盡し、果ては住居も断はられて、着のみのまゝ、路頭に徘徊ふ哀れの身り成下りました。

弟は自分の殘忍の行爲から、姉をば乞食の境界に陥れながら、無情にも姉を振捨て、一人何處ともなく逐電し、果ては寶石盜賊の群に身を投じて、頻りに悪事を働いて居たさうでした。が、遂に免れぬ天の網に罹つて捕はれ、七年の苦役に處せられました。で此日姉は牢獄にと引かれ行く淺間しき弟の姿を見て、餘りの悲歎さど口惜さに、哀れにも其小さき胸は破れて前後の思慮も忘れ、只一圖に身を捨て、此苦患より免れんと、斯くはウオータル橋に走り來たのでした。

デック父子は娘の悲惨な身の上に甚く同情を表して、彼女の心の落付くまで、二人

して兩手を緊かど捉へて懇ろに宥め諭し、或は慰め勵ましなごしつ、幾許かの金子をも恵んだので、娘も稍くに得心して死を思ひ止り、今宵一夜は知己の家に行きて、與へられた金子にて食事もし、一泊をも乞はんと二人に約しました。で父子も安心して手を放ち、猶呉れくも無分別を戒め、翌日は其宿に訪れて、後來の事など相談せんと堅く言葉を番へて、遂に娘を去らせました。翌朝父子は前夜の約を履んで、聞き置いた娘の宿所に尋行きました。折柄何事の起つたか、其家の前は黒山のやうな群集に、二人は吃驚りしながら駈付けて、聞けば、若き娘が二階窓から戶外に身を投じて死んだとのこと。是れは疑ふ迄もなく、前夜二人に救はれた薄命な彼の娘なのでした。彼女の悲痛は纖弱き若き身に負はんには餘りに重荷で有りました。彼女は前夜は父子の温き情けある言葉に慰められて、死を思ひ返し、兎も角も一夜を無事に過したのであるが、翌朝目醒ると共に遺漸ない悲哀の念は又更に轟々と迫り來て、廣き浮世に只一人の便りさへない身は行末のことも熟々と案じられ、悲しさ、

心配さ、心細さの數々は小さき胸に置き餘りて絶望の極、又も心は亂れて、終に高所より身を跳らして半先き長き生命を吾れから斷つたので、斯くして彼女は悲しき短き生涯を終へました。デッキ父子は彼女の運ばれた病院にまで附添ひ行きて、彼女の最後の呼吸の止む時まで、其側に有つて手厚く看護して遣りました。其れでデッキが此出來事と其弟とに付いて、シヨウに話した渠の意見は「其娘の弟といふのも最初はシヨウ、お前のやうな無邪氣な少年だつたらう。だがね、シヨウ、此弟が將來に此悲しい騒動を他人から聞知つて、自分が大變な大事を爲て退けたと始めて覺る時にはマア甚は心持が爲ることだらう？何故なら姉さんの死んだのは手こそ下しは爲ないが、全く自分が窓から姉さんを突落したのも同じことだからね」と云ふことでした。

シヨウは此話を私に聞かせて、後で慙う申しました。

「俺は少年達が倫敦を浮浪いて居たら怎うかと思ひます。何物が其娘の弟を那麼

悪い道に引込んだのでしたか？！ですから俺は倫敦を好きません。成らうなら俺共は茲に止つて居り度いと存じます」。

「假令倫敦に行つたからとて、自分さへ確乎と正しく爲て居たなら大丈夫です。性質の判明ぬやうな人とは無暗に交際しないやうに注意さへすれば那麼悪人達に掛遇う危険は有りません」。

と私は辯解して聞かせました。

シヨウの今一の彼處に行くのを嫌ふ理由は若其處に往つて大勢の來客のあつた場合には何の様に給仕を爲たものかと、其れが少からず案じられたからなのでした。私はシヨウが給仕する際に彼是ど心配して氣を勞らせぬやうに種々に手段を盡して見ましたが、渠は非常なる神経質で逆も痊らんかと思はれました。二三人の客でさへ早心が顛倒して何も彼も無茶苦茶に分らなくなる位でした。

私共は倫敦に居ります間は度々客を招待する積りであるにシヨウが這麼有様では

其時給仕をさせることは到底覺束なからうかと懸念に堪へませんでした。と申して私は怎うも渠に暇を遣る氣にもなれなかつたのでした。シヨウは如何にも性質の善良少年で、而して清潔好で、縮れた毛髪は何時でも叮嚀に梳いて、而も此頃は其れが恰好よく癖付いて来て、日光にキラ／＼する所は宛然黄金のやうでした。手も始終清潔で、小さい足には眞紅の靴下を穿いて居りました。渠は赤い靴下が好きと見えて、新調の度毎に赤いのを買つて来て、而して其れが破れかゝると、自分で器用に上手に繕ひました。何しろ渠は宅の一個の裝飾者なのでした。シヨウは近隣の邸に使はれて居る同じ給仕仲間の少年達からは多少猜れました。夫れはシヨウが其の仲間に加はらなかつたからで、時に彼等が呼出しに參りましたが、シヨウは其度毎に辭を叮嚀にして斷り、決して其友となりませんでした。折節には其少年達の中の何人か一人が主用で、私の許に書狀なり、或は他の使命を帯びて邸へ參りましたが、其時に少年はシヨウを仲間に入入れやうと思つて、主用が濟んでも二三分位は愚圖

々々して歸つて行かないのでした。其場合にシヨウは毎時でも確乎した太い聲で、「失禮ですが、最う御歸りなさつても宜いのでせう。私は是から爲なければならん用が有りますから。君も又御邸の御用がお有りませう？」と、言つて歸し々々致したのを私は度々耳にしました。シヨウは恁うして少年を歸へすと直ぐ裏木戸を閉して、再び自分の用事に取掛つて精々と働いて居りました。

第三章

十月初旬に私共は倫敦に移りました。其當時は召使共はシヨウまでも夫れ／＼餘分な用事で一同却々多忙でした。殊にシヨウには其れが又新らしき經驗でも有りました。渠の骨身惜ます快く手傳ふ其心と、普通よりは少し長い腕で敏捷く働く其手とは其處に役に立ちましたでせう。渠に手傳つて貰つた者の他には話すことの出来ない位で、何品か入用の物の見えぬ時にシヨウは屹度其所在を探し出して呉れます。

し、渠の小刀は何時も頑固の結目を切るに備へられ、渠の肩は大人すら辛き程の重荷を擔ぐ爲に用意して待つて居りました。渠が自分の身体が荷の中に入つて了ふ程の大箱を擔いで階段を降りて來るのを、私は度々見受けました。シヨウは恚う申しました。

「何有に、夫人那麼に、重いと存じません。私はお邸へ上りましてから、毎日結構な食物を頂いて、其上に亦た大變に幸福で御座いますもので、此頃は大層丈夫になりました。大抵な品は何物でも擔げさうに思はれます。彼の大きなピアノでも何難か鳥渡持上げて擔ぎ易くして下さるなら、屹度擔げませうかと思つて居ります。

實際シヨウは壯健で、亦た儘に幸福でもありません。夏季の中は粗末な衣服を着て窓下の場所では花物の手入れを爲せることに致したのですが、渠は甚麼天氣であらうと一日でも其世話を怠つたことはなく、全然シヨウに任せ限りにしても、懸念す

る所はない位に克く培養して呉れました。

斯くて私共は倫敦に落付きました。季候も徐々と冬期に入つて來ました。私共の邸は都市の西の盡端で、幾棟かの同じ建築法の家邸が、二列に對合つて建並んだ其中の一棟なのでした。唯だ私共の側の邸は皆屋後に狭い空地が有つて、其處の一隅に各自の厩が設けられて、其厩の二階は馭者馬丁等の住居に使用されて有りました。而して厩の外側は此一系列の家々全体に通じた一條の裏手路で、此路地への出入口は厩の側に小門が設けられて有るのでした。向側の一列は厩がなく庭と屋後の窓との彼方は直ぐ大道路なのでした。茲はホーリング、パークと呼んで一廓を爲して、此曲輪に屬した専用の私設道路が有りました。其入口には番人を置き無用の人、乞食、門附けなどの入り來るのを禁めて、此一廓内に騒動の起らぬやう、其れを未然に防ぐことにして有りました。

私は都會の住居では田舎の邸に居りますやうに、怎うも暢氣に氣樂に生活せないの

でした。近隣は何れも富有で、絶えず流行を追つて派手に暮して居られる方々斗りですし、其れに此邸に居る間は全然交際垣裡の人となつて、訪問接待に日々を醒醒と送らねばならんものでしたから。

午前中は此の大きな立派な邸宅は何處も彼處も悉皆眠つて居るかのやうに閑然として、唯だ御用聞きごようきの商人あきうの車と、彼方此方の邸で日覆ひおほひを被けたり外したり（是れは舞踏會ぶたうかい、晩餐會ばんさんかいなどを既に催した家と、是れから催さんとする邸が有るからなので）爲て居る職人達の他は、殆ど家の内外に動いて居る人は見えません。十一時じゅういちじも大分過ぎて早正午はやおひるに近い頃から馬車が一臺二臺とポツ／＼小路の方から入つて来て、何人かを午前の運動うんどうに乗せて行くので、徒歩で運動に出掛ける人などは滅多に見られませんが。午後になれば午前とは全然異つて、馬車は喧しき迄に絶間なく轟々と往來して、夫人接客日の邸では入替り立代り引も切らぬ來客で、其應接おんごうに殆ど忙殺されて了ふのでした。私の家も御多分には洩れぬやうな仕合せで、私の接客日は毎週金

曜日なのでした。で遂に案内の報知鐘が鳴り響く此接客日が参りました。此場合にシヨウの接待振りは怎うであらうかと多少心配して居りました。處が全く案外で、却て居なくては困ると思ふ程で、當人も又喜んで働いて呉れました。渠は此日には特に服裝に注意して、臆が厭されて痛くはなからうかと思はれる斗りの高襟たかいかりんを付けて居ましたが、併し其れが爲に少くも五分はシヨウの脊丈せいぢやうが高くなつたやうに慥に見えました。斯くてシヨウは廊下の入口の扉の脊後に立つて、客の案内を乞ふや、直様扉を開く用意をして居りました。渠は先天的に案内人として此世に生れ來たのではなからうかと思はれた程の案内上手で、客人の姓名など一度も間違つたことななく取次振りの、如何にも沈着いて、全く場慣れた小姓のやうでした。シヨウの格別に誇りとして居たことは客人達を座敷から温室おんしつに導行くことで有りました。楠木や草花の手入を爲たり、水鏡すいけいで掛列かけりべてある鉢籠はちかごを洗ふなどは渠の非常に樂と致したことで、折々は私を驚かせやうとて、自分のタシない小遣鏡こづかきの中から

數十錢を割いて、麝香草、石長生其他彼の力で買ひ得る草木に費されることもありません。シヨウの毎月の給料は悉く實家に送りますので、自分は臨時の貰ひ貯蓄を小遣錢として居りました。渠が何時でも可愛い眼色して気軽に愉快に客人達の用を辨じましたので、客人もシヨウを愛して、時には私が多過ぎると思ひました程の多分の金子をシヨウに心付けて下さるのでした。頼て良人も旅から歸郷して、而して彼も亦た直ぐにシヨウの世話を受くるやうになりました。靴を磨いたり、服の塵埃を拂落したり、那麼細小い用事はシヨウが引受けて爲て呉れました。愈々一日小晚餐會を催して三四の客を招くこととなりました。私はシヨウが安心して上手に食事の給仕が出来やうかと頗る懸念に堪へませんでした。

私宅の食堂は床板が槻で、其れが滑る迄に能く拭き込まれ、其上に非常に大きな熊の皮が一枚布かれて有りました。ですから迂濶り熊皮の上に足を踏み掛けますと、

兎もすると皮が滑り逃げて危険至極なので、犬すら避けて乗らん位、幾人か此危難に出遇つて仰向けに轉倒げました。

良人の歸郷した當日、私共は私の姉と一人の友と晚餐を共に致しました。其食事前に私は良人と共にシヨウに付いて少しく談話を致しました。良人は渠の餘りに矮少いのを笑ひまして、而して私が彼の性質を手紙で問合せたことに付いて、些つと叱責を言はれました。否、其れども叱責る眞似をされたのでせうか、兎に角恚う言はれました。

「年少御婦人よ。一夜田舎盜賊の五六人の一群が私共の邸に來襲して、シヨウ、コール氏と懇意になつても、貴女は決して驚愕召さるなよ。」

良人は未だシヨウを克く御知り遊ばさないから、其れで那麼ことを仰有いますのでムいます。」

思慮の深い良人は又申しました。

「貴女は那麼に能く彼の子僧の性質を見抜きなされたのですか？え、年少夫人、考へて御覽なさい。渠が邸へ来てから未だ半歳しか経たんざや有りませんか、田舎の邸にはシヨウの取扱ふ器具に左まで高價の品も餘り有りませんが、併し當邸ちやア渠には随分荷が勝過ると、乃公は思ひます。實際皿や茶碗のやうな品でも、其他の器具でも、何れも高價の品斗りで、加之に渠が平生出納して居る腕厨に悉皆納めてあるのです。未だく、全くの少年である渠に其の器具の取扱ひを一切任せるのは不安心の至りでは有りますまいか？誰人か女中の一人に腕厨の管理を爲せたなら宜からうと思ひますがね。而して一体シヨウ先生は每晚何室に寐るのですか？」

「シヨウは階下の臺所の次の室、アノ邸の一番後の隅の室に寐しますのです。マア彼の子が每晚甚麼に注意して器具の箱を調べますか、一度御覽遊ばせ。一個々々品數を算へて、其れから取締りのウイルソンに手落ちのないやうに檢分して貰つ

て、其上で腕厨にピンと錠を下ろし、鍵をばウイルソンに渡すのでムいます。ですから何人も容易に腕厨を開けることは出来ずまいし、亦た彼の重い鐵の厨子を其儘で擔ぎ出すことも六ヶ敷いでムいませう。其他には彼の室に別段盜まれる程の貴重品の品も置いて有りません。其れにシヨウは極々正直な子ですから多分大丈夫だらうかと、私は存じて居りますのです。」

「左様ですか。左様で有れば結構です。」
と、良人は言はれましたが、衷心には未だ全く安心しては居られなかつたやうでした。

其れから私共は晚餐の卓に就いたのでした。折柄シヨウは飛んでもない失体演じました。渠は例の通り心配しながら給仕を致したので、客人達に先づ第一に給仕すべきを打忘れて、食品をば一々私の許に先に持つて参りました。此時の小間使は生憎新参者で、未だシヨウとの馴染も薄い處から遠慮用捨もなく、他に聞えるやうな

聲で、シヨウの誤りを咎立て致しました。爲に神経質のシヨウは一層ハラ／＼して愈々事體を悪くして了りました。客の一人が牡蠣汁をと言つたので、小間使が其汁碗をシヨウに渡しました。シヨウは少しにても手早く給仕を爲やうと思ふ心から、餘り急いで、彼の熊皮の上に軽く足を踏掛けたから堪りません、可哀想に牡蠣汁を手にした儘、仰向けに轉倒れて、汁をば半は萌黄色の眩悪椅子に、餘は姉の脊に浴せかけて了りました。此折のシヨウの驚愕といふものは何とも言ひやうがない位で、自分の粗忽を甚く悲しみ、且つ怖れて、宛然夢中のやうでした。が稍／＼に起上つて震聲に怖る／＼深く詫入りしました。

「誠に飛んだお申譯のない粗忽を働きました、何共相濟まんことを致しました。どうぞ御勘辨を願ひます。實際熊の皮が滑りました爲に躓きましたので、御召物や椅子なご汚しまして重々恐入りました。どうぞ御免下さいまし。」

渠が粗忽を悲しんで深くも恥入つた其様子といひ、亦た心から詫ぶる其態度が奈何にも眞實にいちらしげなので、良人すら笑顔をせずには居られませんでした。是れは以後のことでしたが、佞奸な反逆者熊の皮の爲に恐しい不幸に出遇つたシヨウは一日小間使に慙う申して居りました。

「御前さんもお注意なさい。然う爲ないと彼の熊奴又お前さんを引倒しますよ。俺は先日怎ういふ態に熊奴が俺の足を捉へて轉ばしたか、彼時のことは決して恐れませんが、ですから可成熊の傍に寄らんやうになさいね。彼奴は何時もお前さんを倒さうと待構へて居るやうですよ。俺は最／＼轉ばされは爲ません。俺は最／＼う倒すことは出来なだらうと熊に威張つて遣ることが出来ます。」

此大失体以來シヨウの神経は愈々昂じて、食事の度毎に競々して給仕する所爲か、馬鹿らしい間違さへ度々致しました。で一日私は渠を呼んで尙少し早く給仕法を覚え、其れに熟練て呉れなくては、餘儀なく暇を遣はさねばならんかと、自分は心配して居ると云ふことを懇々と言ひ聞かせました。

温めた皿を命ずれば冷へたのを持つて來たり、珈琲と言へば茶を注いだり、或は間違た方向から小皿を差出したり、這塵粗勿を度々仕出すので、良人は少からず迷惑がつて居りました。ですから此のやうな過失が絶えず繰返へされるやうでは、怎うしても勢ひ暇を出さねばならなかつたのでした。

シヨウは謹んで静肅に私の叱責を聴いて居りましたが、遂に怵へかねて、私が吃驚り致した程ソツと聲立て、泣出しました。而して噓り上げなから涙の顔を上げて

「夫人、今後は尙一層克く注意けまして、一生懸命に覺えるやうに屹度致します。

私は實際馬鹿なのでムいます。毎時でも御客様の御出での節には自分で自分の心に、「怎ういふ状にお給仕を仕なければならぬか克く考へて致しませう。皿類は皆様の左側から差上げ、ラム子は先に注いで、珈琲は食事の終りに胡桃や葡萄や其他の品々と一緒に出すのですよ。御主人のお隣りへ御着席なさる御客様に一番先にお給仕して、夫人のを最後にするのだから、克く記憶て間違はないやうに

なさい」と恚う申しますのでムいます。心にはチャンと記憶て居ましても、御客様方が御食卓にお列席になつて、彼品呉れ、此物持つて來いと種々御吩咐下けます。此の御用はジエインが勤めるのだらうか、其れとも私の役目かしらと迷つて了ふのでムいます。左様なると私は最う氣がワク／＼して、何が何だかさツバリ分らなくなつて、手はブル／＼震へ出して全然夢中になつちまいますので。夫人、お暇：下さること丈は：どうぞ御勘辨下さいまし。私は夫人も殿様も大好きなのでムいます。ジエインに尙つと克く／＼教へて貰ひます。而して甚麼に私が精出して習ひますか御覽下さい。：夫人、どうぞ「では今暫く使つて試して見やう」と仰有つて下さいまし。御願ひでムいます。」

私は何と答へられませう。唯だ「諾」と言ふより外に答へることは出来ませんでした。此後シヨウは兩三度大分上手に其役目を成果せました。が此等は些の二三人の小晚餐會でしたから、従つて給仕も容易いのでした。けれど近々の中に私共は一大

響應を催す積りでした。而して其日の稍く近寄つて来るにつれシヨウは心配して青くなつて居りました。

恰度此折のことでした、私が夜半に階下の一室で宛ら人でも歩行くかと思ふやうな妙な物音を聞いて、其れに睡眠を醒まされましたのは。而して其時一度は慥に何品か重量品を落したやうな響をも耳に致したのでした。良人は「何事でも有るまい。別段恐怖るやうなことをぢやないでせう」と申して自分で階下へ見巡りに参りました。が家内は平常と異つた様子も見えず、又何の物音もなく聞りとして居りました。けれど其翌晩も私は重ねて同じ物音を慥に聞きました。で良人の止めるのも聴かずに私はウイルソンを喚起し、強いて臺所まで一緒に参るやうに命じました。私は若賊が恐入らうとなら、邸の裏手から這入れれば造作なきこと、兼て思つて居りました。何故なら家屋の基礎の周圍が低くなつて居ますので、若窓から見えぬやうに床下を何か道具で破れば容易く忍込めませうし、或は路地から厩の屋根へ上つて、其處が

ら庭へ飛下りても難なく這入られるので、其れに又巡查も番人も唯だ表道路を巡視いたす丈で、裏手は全く不用心なのでしたからでした。其れは勿論臺所でも、シヨウの寢室でも何れも堅牢な鐵の關貫が申して、嚴重に締りが致して有りました。が併し幾許鐵の關貫でも賊に遇つちや。直ぐ鋸割にして外されて了ひませう。ですから私は絶えず賊に付いて不安の念を懷いて居りました。

私はウイルソンを従れて忍足に階下に降りまして、丁度臺所の段階に足を踏み掛けました時に「サア早くお爲なさい」と囁く聲が耳に入りました。で私はウイルソンに耳語しました。

「ねえ、ウイルソン、お前さんには今の囁聞が聞えなかつたかえ？ 私の疑心暗鬼とやらだらうかねえ」。

「いゝえ、夫人、慥に話聲が致しました。而して聲のする處はシヨウの室のやうに存じます。殿様を御呼び申して参りませう」。

私共は又二階に戻り、今度は良人をも伴ひて再び階下に降て来て、而してシヨウの室の入口に立つて、良人は呼はりました。

「シヨウや此扉を開けな。誰人がお前の室に居るのか？」

「いゝえ、何人も御出ではゐません」。

とシヨウは震聲で答へました。良人は重ねて申しました。

「早々と扉を開けなさい」。

扉は直ちに開かれ、シヨウは蒼白い顔色して立つて居りました。が恐怖の色は少しも帯びて居りません。亦た室内にも何人も居りませんで、シヨウは慥に臥床に眠つて居つた様子でした。で其場所の光景から全くシヨウが寐言を言つたのだと合點致されました。私共が聞いた寤足は或はシヨウが夢中に室内を歩行たので有つたかも知れません。

饗應の日の前日にウイルソンは私の許に参りまして、近頃シヨウが怎した理由か、

日頃の渠とは全く様子が一變して、朝も平生の時間には起きて來ない斗りか、而も終夜全然眠らなかつたかと怪しまれる程眠た氣な状態で、而して最早疾づくに寐た頃と思ふ時分に、渠は何故か再び臺所に出て來て、椅子や器具などを動したりとすると見え、其等の器具がウイルソンの置いた位置より他場所に移し替へて有つたりするので、ウイルソンが臺所に這入つたかと問ねた處シヨウは這入つたとは答へたが、其の何の爲といふ理由は言はなかつた、といふやうなことを、話しました。

私は其日はシヨウに叱言を言ふことを好みませんでした。兎も角も饗宴を濟してから後に、シヨウに問質して其不審の源因を明白にさせませうと思つて居りました。事實の場合から推量へますとシヨウに頗る怪しむべき疑しい舉動が有るやうに思惟れましたが、併し私は渠が決して虚言を言はぬことは知つて居りましたので、私の渠に對する信用は動かされませんでした。

其夜ウイルソンは二度私の寢室の入口の處へ参りまして。

「夫人、只今シヨウが先刻御話申上げた後業を儘に始めて居ります。燈火の光線が
 既の壁に照射して居るのが、私の寢室の窓から見えて居ります。其光線は儘にジ
 ヨウの室から射して居るのでムいます」。

「では何を爲て居るのか見度いがね、怎うしたら宜いだらう」。

と私が申したので、良人は直ぐ恚う答へました。

「其れは造作もないことです。庭園に下りて木戸口から裏庭の方へ出れば恰度其處
 はシヨウの室の窓と對合つて居ますから風雨戸が閉めてあつたら、其隙間から窺
 いて見たら宜いでせう。先方からは此方を見られません」。

で私共は感胃に犯されぬやうにと皮の外套に包括つて庭に下り、直ぐにシヨウの室
 の前に立つて窓際に身を寄せて室内を窺きました。幸に風雨戸の條板が所々開いて
 居たので判然と見えました。が私共にはシヨウが演じて居る不思議の舉動が最初は
 一向に解りませんでした。

一個の卓は室の中央に据ゑられ、其上にテーブル掛けの代用としてか白き布は擴げ
 られて、植木鉢の臺皿の幾枚かは卓上の兩側に同じ距離を隔て、數箇所に排べ置か
 れ、其皿の在る所には各々其前に一脚の椅子が備へられて、而して卓の中央には高
 い籠が載せ置かれました。是れは此朝スケルトン、チースを取出して空籠となつた
 もので、正しく中央の飾籠として用ゐられたものらしいので。又シヨウの洗面器の
 臺上には數多の壺と壺とが排列べられ、植木鉢の少なき臺皿の側には或種の二個の
 器物が置かれて、一方には形状の奇異げなジャム壺が一二個入れられて、他の方に
 は破損れた硝子盃、茶碗其他の類似の品が入れて有りました。シヨウは拔足しつゝ、
 静に而も敏捷に椅子から椅子へと走せ巡つて、今渠は恰度水の入つた壺を手にして、
 何事か言つて居るかのやうに口唇を動して居りました。頓て渠は盃の上にジャム壺
 を載せ、手にした壺の流動物を其れに注いで、再び以前の塲所に置きましたので、
 私共は始めて渠が假想した客人に話して居たのだと、稍く合點が參りました。

渠は又折々臥床の方に走つて行くのでした。其所は梳厨として用達られた様子で、其處から皿類を持参した心得で、一個宛想像客の前に配付る真似をして、其れから又敏捷く椅子から椅子へと走せ巡つて、間違つた方向から給仕した場合には二度正しく爲直して、而して何事か絶えず語りつゝある様子でした。

可憐の給仕よ！渠は饗應の席にて給仕に過失のないやうにと甚く心を勞して當日までには幾分なりとも上達して居なければと思ふ心から斯くは夜なく睡眠の時間を割いて、其處に有り合せの品々を食器に代用して、一人熱心に給仕法を練習して居たのでした。終日忠實に働いた人々は一同臥床に安らかに眠つて居る真夜中を、而も毎夜シヨウ而已は一人斯くまでに自分の任務に心配して、小さき心臓を疲勞に破れん斗り、大きな碧色の眼は睡眠を辭して、而して天性賢く快く働く双の手は只一つ其働きを妨げる神経質と戦はん爲に、斯くも勉強した居たのでした。實に數時間前に眠るべき渠は、今其想像客が食卓を去つたので、稍く責務から免れて、心配

さうな視線を良人と私とのナブキンの上に投げつゝ、靜に丁寧に疊んでナブキン狭みに納み、ホツと重荷を下したといふ様子で、而して恰も「唯今僅に試練が相濟みました」と告げ顔に其瘦せた小さな蒼白い顔面を上げて圖らず此方を見ました時には、私の胸は塞つて張り裂けるかと斗に思はれました。

何と云ふ悲愴な状況では有りませんか！薄暗い燈火、聞きとした寂しい室内、排立られた食卓、人なき椅子、此室此場の光景は人をして慙う想像させるでせう。數人の暴飲妖怪が自分等の種々の吩咐に、唯々として喜んで忠實に給仕する弱々しい少年給仕に顯れ出たのであらう。

此時私はヒステリー症の發病前に起る一種の鋭き神経作用が急に劇しく五臓を襲ひ來るのを感じましたので、「最う寢室に戻りませう」と良人に耳語きました。が良人は猶幾秒時か其處に躊躇して、而して再び私をして窓の中に注意させるやうに無言に仕向けました。

シヨウは寐臺の側に跪坐いて、兩手で顔面を掩ふて平伏しました如何様な祈禱が聖座の許に達しましたか、其れは神ならではの、他に知る者は有りません！

が、私は一事を知つて居ります。シヨウが自分の爲さうとした事業を爲し終へた時に、渠の頭腦は甚麼に痛み、渠の支牀は其起床時間の午前六時迄に僅に餘す三四時間間を、是非とも休息ねばならない程に疲れ切つて居ても、猶其れにも拘らず其場で直ちに卑しい僕服の儘で先づ神に祈りました、其れの如く、若世の紫の細布で着飾つた貴族社會の人々が、シヨウのやうに其祈禱は必ず神の受入れたまふ所と信じて主に祈りを捧げたなら、奈何に善事であるといふ只此一事丈を知つて居ります。終に私共は潜に茲を立去りました。爾來シヨウに對する私の信任は動かすべからざるものとなりました。此後悲しむべき事件の起りましたは一再に止まりませんでした。が毎時私の信用は變りません、次の章に出來事の一つを御咄し申上ませう。其事件はシヨウには眞に一大災厄で、其折の四圍の事情が凡て渠に敵對して、其信實

の上に最も慘酷な疑を懸けるやうに私共を餘儀なくさせたのでした。が併し此場合にも彼の老實の友であつた私は其疑念を打消さうが爲に、渠が此寂しい夜半に只一人神と共に居つて、跪坐いて祈りを捧げて居る其小さき容姿を心中に喚起して、遂に渠を疑ひませんでした。

斯くして待設けられた晚餐會の日は來て、而して饗應は滞りなく濟みました。シヨウは立派に其職責を盡しました。渠の夜半の練習は慥に報酬はれました。渠は敏捷に而も注意周到に立働いて、客人達の望む悉くを快く給仕致しました。

一何處で彼のやうな好給仕を御抱へになりましたか？ 渠は慥に立派な給仕人か、或は何人かに就いて其方法を學んだのでせう。何しろ多くの客人の給仕に熟練した者です。

と、來客の幾人かは賞められましたので、御影で私も渠に付いて自慢することが出來ました。

其翌日シヨウは私の許に七圓餘りの銀貨を持つて参りまして客人達が渠に非常に親切で有つたことを話して、後で慙う申しました。

「アノ私はお客様方に何物か頂き度いとお願ひ申も致しません。又他家のお給仕さんのやうに御客様から幾許かの御心付けを頂かうと思つて、皆様方の周邊に附纏つて居るやうな那麼下卑しいことは決して致しませんでした。ですけれどお客様方皆様がこの金子を下さいました。お一人の方などは廊下まで追駈けて被來して「サアお前に此金子を上げやう」と仰有つて下さいました。けれど夫人、何の爲に皆様がこの澤山下さいましたのか、私にはサツパリ分りません」。

シヨウは知らんでも私には分明つて居りました。其れはローリング博士が與つて下さつたのでせう。博士は知名の醫師で、良人の最も親しい友なのでした。君共は博士に夜半にシヨウが給仕法の獨り練習を致した話をしたので、博士は非常な興味を持つて其れを聴かれたのでした。噫シヨウよ此響應の晩お前を愛してお前の縮毛頭

を軽く敲いた親切な博士の手は、亦た他日お前の小さな手首を把つて、衰へ果て、次第に遅く微く成つて行くお前の脈搏を算へられるであらう。其時お前を愛した私共はお前の臥床を取り圍んで、一縷の希望の綱の見出されやうかと、徒らに心配しつゝ賢げな美しいお前の容貌を凝つて見守つて居るで有りませう。

第四章

前三章に記載した此断を讀まれ、シヨウの運命に付いて多少興味を持たれた讀者（其れは無論少數の方々で有りませうが）に一言致し度いことは此断も今や略ぼ一段落に達し、私も亦たシヨウの生涯中に遭遇した悲惨事件の數々の、而も今は過去のことになつたのを、再び私の心中に一々喚起することは私の望まぬ所でありますので、私は喜んで此章で筆を擱くことに致した一事で有りませう。

現今は私も寄る年浪の老の身となりましたが、以上述べ來つた断は私の此白銀のや

うな髪の毛が未だ黄金色に輝いて居た年若い頃に起つた事實なので有ります。私は
 當今は心に平和と希望とを得て静に神の召し玉ふ日を待つて居りますが、過越し方
 の生涯を回顧みれば、私の運命も随分拙いものでした。戀しい良人には遅れ、老後
 の杖とも慰藉とも頼んだ可愛い子供等にも先立たれ、懐しの良友達にさへ別れて、
 一人此世に取残された而已か、猶是等死別の悲みにも彌増して情けなく思つた苦き
 經驗をも嘗めました。其れは私が深くも信任した人々が恩を忘れ、義に負いた振舞
 をして、全く信ずる價值のない者と成果てたことで、其れを初めて知りました時の
 私の心中は言ふ斗りなく不快を覺えて、思はず悲憤の涙を流しました。が是等散々
 の憂目も幸に私の心をして今是より御話致たさうと思ふ事件を、心も傷めず、涙も
 なしに平氣に語り得る迄に剛執には化しませんでした。
 談話が思はず別途に逸れましたが、是より直ちにシヨウの生涯に於ける一大慘事を
 申上げませう。

却説彼の大饗應後暫くは話すべき程の事もなくクリスマスも過ぎて、最愛の良人は
 再び數ヶ月の旅程に上りました。私共は「最う春に間もない」と言ふ時分にならば
 早々倫敦の邸を片付けて、亦た田舎の別荘に移りませうと思つて居りました。田舎
 にはシヨウの可愛の者共が別荘守の植木師に預けられて有つたので、渠はウィルソ
 ンに向つて其等の者の噂を言出ない日とては一日もなかつた位でした。其處にはジ
 ャックドウ鳥(是れはシヨウの格別に愛するもの)も居れば憐れな鳥も養はれて居ま
 した。此鳥は不圖した事から其一眼を失つて片眼となつた者で、良人は一ツ目小僧
 と名付けました。が繪畫で見ると一ツ目小僧よりは一層見醜く、私は這般見苦しい者
 は曾て見たことがない位で、暗い夜など庭の木陰の隠所から出て來て、其恐しい一
 眼を光らせる物凄さといひ、亦た折々此世のものとは思へぬやうな聲音で、ホーホ
 ーと啼く氣味悪るさといひ、孰れも何共譬へやうがないのでした。メリーなどは其
 聲音を聞くと慄つと身が縮まると申して居りました。けれどシヨウは其の一ツ眼小

僧をクルビーと呼んで可愛がりましたので、無心のやうな鼻にもシヨウの愛情が通じたものと見えて、彼はシヨウの後を追つて庭内を彼此方と飛巡りました。此他には私共の飼育つて居つた數頭の犬を、恐しい畏の危難からシヨウに救はれて辛くも生命拾ひをした二三疋の不具犬と、一二疋の猫とが居りました。是等は皆シヨウの樂みと致したもので、シヨウは毎週廿五錢の金子を園丁の息子の許に送つて、何品か買つて彼等一同に與へることを依頼んで居りました。で園丁の息子からも其都度彼等の健康の狀から、可笑げな所作まで逐一書いて報じ越しました。是等の動物の外に猶シヨウ自身の所有の花園が有りました。が是れは花園といふよりは植物の病院とか、養生園とか呼んだ方が寧ろ適當で有りませう。何故なら其處の草木類は一度は枯凋かけて、早園丁より見離され、雑草の束と共に火中されるべく投棄てられたもので、其れをシヨウが拾上げて丁寧に鉢に植ゑ、根氣よき世話と絶間なき注意とに由つて、二度青々と生き返るまで培養し、小さき嫩芽、或は蕾が

現出れて、全く蘇生つた状態を呈する迄は其儘に鉢に置き、慥に生命の液汁が亦た自由に沿く循環するやうになつたのを見定めてから、始めて渠が自分の庭園と呼んで居る、此養生園に移し植ゑられたもので、悉くシヨウの丹精で育つたもの斗りなのでしたからです。

庭園の片隅に設けられた此狭い四角な花園に何のやうな寶物がシヨウを待つて居りましたらうか。早速莖を摘採で、什麼狀に花束を作つて夫人に差上げやうかしら渠がウイエルソンの宵々毎の會話は何時も愛する動物と其小さき花園に歸り行く日を指折り數へて待つて居たことでしたとは！

私共は狐狩に使ふ獵犬のボギイと呼ぶ小犬只一疋を倫敦の邸に連れて參りました。此犬も矢ッ張り倫敦の住居を甚く嫌つて居りました。閑靜な田舎生活に慣れた者が、急に繁華な都會に来て、毎夜絶間なき馬車の車輪の轟き、馬の蹄の音、馭者の叫ぶ聲、近隣の流行社會の人々が起す種々の音響などに妨げられて、碌々休息し得ない

からでした。で彼は夜毎無暗と非常な聲して烈しく、吠立て、は家内の人々の安眠を驚かすので、爲にシヨウは度々夜半に起出で、ボギイを抱いて其吠立てるのを拒いだ程でした。

私は前にも述べました通り、却々の神経家なので、良人の留守に猶數過間倫敦の廣い邸に生活することを考へますと樂みよりは却て心配で、少しも愉快を感じません。で、早くより寡婦となつた姉と其娘達に猶暫らく逗留して貰うことにして、而して只管恐怖の念を追拂ふやうに務め、暗き夜が一日と短くなるを樂みに、要なき杞憂はせぬことに決心致したのでした。其れに私共の邸は何處も彼處も堅牢な門や鐵鎖りなどで嚴重に締りがして有りました。

或晩私は何故か平生よりは一層神経が充つて、何とはなしに頻りに恐怖の念に襲はれました。四五日前に亞米利加から到達く筆の書状を日々待つて居りましたが、此日になつても未だ音沙汰が有りません。が此夕には亦た郵船が着することを承知し

たので、然らば午後十時の最後の配達には必ず達くであらうと、案内鐘の鳴るを待つて居りました。が亦たも待ち草臥の徒勞となりました。尤も非常に鋭い鐘は聞えましたが、其れは隣家のものでした。私は今は怵へかねて、涙の自然に堰り來るので、他人に見られんも恥しく、で一人先に寢室に退きました。

私は暖爐の前に腰掛けて火に温りながら、只管良人の身を案じ、疾く來るべき便りの今日もなきは若や旅先に異變の起つたのでは有るまいか、身に危難はなかつたらうかと、其れから其れへと思ひ煩へば恐怖の念はいよ／＼加はつて、不祥のこのことのみ想像され、果ては胸さへ痛くなつて一人悶へて居りましたが、何時しか案じ勞れて眠入つたものか、轉寢の窮屈と、グツと寒氣の身に染みたので、不圖眼を醒され。見れば爐の火は早燃へ盡くして白き灰の冷たく残れるのみ、家屋の内は寂寞として宛ら墓所の如く、往來も今は人足絶えて、何れの饗宴から遅れて歸る馬車も聞えず、四邊りに何等の微音もせず、時計を見れば早三時半、恰度天明前の戸外は最も暗黒

時刻でありました。私は急いで臥床に這入りましたが、今は却々に眠が冴へて敷を算み、暗算を試み、或はいろはを繰返し稱へなごして種々眠らうと務めました。何の効も有りませんでした。で私は横臥した儘、何故とも自分にも分らなかったので、唯だ一心に耳を峙て、居りました。スルと程なくカタンと確に屋内の何室かで何品か取落したやうな物音がしたので「オヤ、即刻の音響は何だらう？」といよく耳をすまして居りました。が、其後は森閑として何音も聞えませんが、唯だ自分の心臓の鼓動が呼吸をも止むるかと思ふ斗りに烈しく高浪を打つて居るのが耳に入る斗りでした。

「何事でもない。今夜は怎うして這麼に馬鹿らしい程神経が亢進つてるのだらう。邸内に何事も起つたのぢやあるまい。若し變つた事件があればボギイが吠へるだらう。」

私は恚う獨語つて、強いて心を取直して眠らうと試みました。

「ア、静閑に！確に人が階段を昇降して居る蹻音が聞えましたよー」

私は最う心配で一人りでは居られなくなりました。私は梯子段の傍の室に寝て居た姉の許に出掛けて、此一夜を過さうと思ひ、慌だしく衣服を重ね着て、上靴を穿き、而して室の扉を開けました。其途端に私の許へと出て來た姉にバツタリ出遇ひました。

「這入つても宜しいの？娘共は恐怖がらせないやうに彼儘ソツと寝かして置きませう。階下の室に何事か變つた事件が有るのですよ。一時間程前にボギイが夫はく酷く吠立てましたが、急にバツタリ吠止んで了ひました」と姉は申しました。

「左様でしたか。では夫れは私が眠つて居た中のことでせう。那樣なら屹度又シヨウがボギイの吠へるのを聞いて毎ものやうに自分の臥床に連れて行つたのでせう。」

「左様かも知れませんが、ですが私は邸の背後の室の方で妙な怪しい物音がしたのを聞きましたよ。最初はシヨウの室の方に其物音がしたやうでした。マア、兎に角階子段の所まで出て来て克く聞定めて御覽なさい。」

世の幾多の人々が難に臨んで、危険と知りながら、其れに敵對ねばならん場合に遭遇へば、思はず知らず自然に剛毅の心を奮ひ起して、十分夫れに抵抗する勇氣を持つやうになるのは不思議のやうですが、實際事實です。此夜に於ける私の場合も實に其通りでした。私は梯子段まで出掛けて其處に少時佇立て凝ッと聞耳立て、居りました。スルと二三分の後、階下の室で宛ら人が楚音を竊んで室内を歩き廻るやうな音が聞えました。

「成程、慥に四五人は居る様子でいますね。何んだか床下の方へ下りて行くやうですね。若私共が潜つと階下に降りて客間に行けば其處の窓から巡查なり番人なり呼ぶことが出来ませう。二人ながら朝の七時までは絶えず此廊中を巡回つて居

るのですから。」

と、私は姉に耳語りました。

「ですけれど、其れは考へものですよ。若私共……なり番人なりを大きな聲音して呼べば、其聲音に娘共は驚かされて眼を醒し、而して自分達許り室内に残されたと氣が附けば、其處に吃驚りして騒ぎませう、是れに召使共も狼狽へて叫びながら夢中に其處等へ駈出ませう。這麼場合には大方毎時左様ですからね。マア、何しろ階下へ行つて慥に賊が這入つたのか、怎うか克く見届けて、其上で何とか好い手段を考へた方が安全かも知れませんよ。臺所へ降りる階段の入口は堅く締りがして有るのですから、賊は屹度臺所に居るのでせう。若何うにかして番人を知れんやうに呼ぶことさへ出来れば畏にかけて賊共を捕へられやうかと思ひます。番人を潜つと客間から入れて、溫室を通らせれば庭園に下りられます。賊共は屹度厩の塀を乗越へて路地の中に飛下り、其處から這入つて來たのでせう。若左様

なら又同じ路途から逃げて行くでせうか。其時番人が庭の出口に待伏せして其逃路を塞いで居れば、其處で難なく捕へられませう。

姉の此の言葉に私も同意して、二人恐びやかに階子を降りて客室に入り、中から扉に堅く錠を下して、出来る丈静に注意しながら一方の窓を開きました。夜の幕は既に上げられて、大路の凡白は判然と見分られ、遙か彼方に巡回中の巡査の姿さへ認められました。が折悪しく巡査は此方へ来るのではなく、向側を彼方へ去る處でした。渠は大路の突當りから曲つて、私共の後側の邸々の前に出て、其通りを巡行して、頓て反對の方向から二度此方の側に現はれるので、是れに此大通りには中間に横町といふものがなく、四十軒餘りの大きな家邸が對合つて建列んで有るのでした。

ですから私共は何う致すことが出来ませう!? 巡査が此方へ巡回して来るのを待つては居られません。此所迄来るには二十分から要りますし、其中には夜は全く明け渡

つて刻一刻と光明くなりますから、賊共は客間や食堂を残して去ることは致しますまい。屹度客室に這入つて來ませう。然うしたら私共を見て後日の露顯を恐れて殺しませうか。即刻直ぐに巡査の注意を此方に呼ぶやうに致せば宜いのですが、偕何う致したら巡査が此方に氣が付きませう、姉は扉に身を寄せて賊共の動靜を窺つて居りました。賊共が臺所の階段を昇つて來るらしき音を聞く毎に私共はヒヤヒヤして震へて居りました私には明白りと彼等が臺所と食品貯藏室とで仕事を爲て居るのが聞えました。が、ボギイは何故吠立てないのでせう? シヨウは怎うして起きて來ないのでせう? 私は不審に堪へませんでした。

「茲の物見臺から立關前の敷石の所へ、橋のやうに何物か横に架け渡すことが出来れば造作ないと思ひますが怎うでせう? 此所から彼處まで那麼に隔つても居ないやうですね。若斜に飛下ることが出来れば大門を開けて、直ぐ巡査の後を追駆けて伴れて來られますが。何とか一つ試して見ませう。」

私は姉に慙う耳語きました。が姉は止めました。

「お廢止なさい。落ちれば死みますよ。距離はあなたが思つてお出でよりも尙多離れて居ますよ。」

けれど巡查を此儘に見送つたなら、再び茲へ巡回して来るまでの間に其處危難が迫つて来るか分りませんと、私は思ひました。で兎も角も何うにか工夫して見やうと決心致しました。女中共の誰人が目を醒して驚いて叫んだり、シヨウが起出たりして、萬一賊共に銃殺されるか、或は斬殺されるやうなことででも出来たら其れこそ大變だと思つた此の考想は私に非常な大膽な念を奮ひ起させ、全く自分一人が召使共を助け得られるので、又怎うしても救はねばならぬと云ふ觀念を興へました。幸に家屋は念入りに建てられて有つたので何の窓の戸も至極漫かに些少の音も立てず容易に開閉が出来るのでした。私は玄關に接近した窓を開けて、最下の物見臺から石段の小縁まで僅か二尺位しか隔つて居ないのを確めました。其二尺の處を斜に飛

下りるのが私には大役で怖しさに躊躇つて居りました。其時姉が、誰人か臺所の階段を上つて来たやうですよ、と細語きました。

で私は物見臺から石段へ何品か架して只僅の一分時自分の身体の重量を支へさへすれば宜いのだが、橋になる品は無からうかと室内を見廻しました。時に眼に入つたのは火爐の圍の板で、是は堅牢で長さも十分なれば、至極適當であらうと、直様其臺板を橋にして、私は窓の外に出て、到頭石段の上を下り立ちました。

次に私は重い鐵門の柵手を掛つて旋りながら、振返つて臺所の正面の窓を見下ろしました。時に其處に立つて居た惡漢の一人が不圖此方を見上げて私を認めました。其容貌の獐惡なる一眼に戰慄とする程で、怖しと思つた心は足に翼を借して私は飛ぶが如くに大路を走り行きました。幸に巡查は彼方の曲角で背後を振返つて駈來る私を認めましたのど、直ぐ呼子笛を吹鳴し、而して此方に走せ戻つて呉れました。私は餘りに走つたので呼吸が迫り、容易くは物が言はれませんでした。が、巡查が身

体を支へて呉れましたので、喘ぎ、「五十番地(私宅の)に賊共が這入りました」と辛ふじて言つたが、其儘悶絶して其場に倒れて了ひました。程経て正氣に復しました時には、私は自分の臥床に臥かされて、姉も、恐怖を懐いて居る女中共も彼の巡查も一同私の周邊に集つて居りました。人々の言ふ所を聴きますと、彼の窓に立つて居た悪漢が私の姿を見送りますや否や、折柄恰度臺所から客室に通ふ階段の上の入口戸の錠前を頻りに振り曲げて居た仲間共に告げ知らせ、而して周章て一同庭に飛下り、恐込んだ時に、厩の塀に立掛けて置いた梯子の方に走り去つたらしく、姉が其聲音を聞いたことでした、而して猶賊共は追跡されるに多少手間取らせやうと思つてか、一同が往來に下り立つた後で、其梯子を引上げて隣家の庭へ投込んだものと見え、梯子は其處に打捨て、有つたさうでした。廊内の管理人も巡查の鳴した呼子を聞くと、直ぐ邸に駈付けて呉れまして、私の出た窓から這入り、臺所へ通ふ階段口まで走つて行つたのでしたが、賊共が小賢くも

扉の容易に開かれぬやうに錠前を何品で抑へ付けて置いたと見え、何程錠を振つても回轉りませんでした、其處で今度は客間から温室に出て庭に下りる積りで温室へ来て見れば、庭への出入口に篋められてあつた重い硝子戸は既に外され、内側の戸の錠も又外されて、其處には最早賊共の影も見えなかつたさうでした。賊共は大仕事を爲る積りで恐込んだものらしく、が其目的の半分も遂げられなかつた様子でした。臺所の側の食品貯藏室に据ゑてあつた粗毛布の裏の付いた大箱の中には肉刺や匙類の澤山入つた包や、黄金の美しい食鹽器や、婚禮の時に貰つた品など高價の物品が納めて有りまして、其箱の鍵は私が所持つて居りました。賊共は此箱を開かうとして、瓦斯で熱した火箸やうの品で錠前の周圍を焼き、其木の燃へた箇所から中の方を焼切つて開けやうと試みたのでした。が確に不成功に終りました。私は此堅牢な箱の中の品々は賊に盗まれるやうなことは萬なからうと、唯今でも猶且左様思ふて居ります。

「怎うして、此騒動の間にシヨウも起きて来なければ又ボギイも何故吠立てなかつたのでせう？」

と、私は質ねました。姉は私の間には答へないで、室を出て行かれ、ウイルソンは何気ない態を粧つて居ましたが、遂に耐へ切れないやうに急に前垂で顔面を掩ふて泣出しました。で私は身を起して申しました。

「怎うしたのです、何故で一同は然う隠れるのです！シヨウを茲に呼んで下さい。私が直接に事實を聞かしますから」

時に巡查は一步前に進み出て、シヨウの姿の見えなくなつたこと、渠の室の埒なく取散されて有つたこと、又渠が急いだ餘りに取落したものが、渠の靴が丁度賊が盗んだ匙を庭に投棄した其傍に落ちて有つたことなど詳しく説かれて、而して猶シヨウの衣類の四邊に見えぬ點より察すれば、渠は宵には平生の通り臥床に眠ると人には見せて、其後窃に起出て、衣服を着替へたので、又毛布、敷布などの見えぬのは

疑もなく盗んだ品物を其れに包んで持つて行つたものに相違なからうと思ふと云ふ自分の意見をも言ひ足されました。

「那麼ことが有り得べきでせうか？貴下はシヨウを賊の仲間だとを疑ひなさるのですか！」

と、私は反問しました。

「サア、夫人。怎うも奇怪のやうですが、マア、何うしても然うらしく思はれますな。渠は最階下の而も賊徒の這入つた入口の側の室に寝て居ながら、驚愕の只一聲すら敢て發しなかつた其様子から考へて見ましても、怎うしても兼て申合せて期待して居つたこと、しか考へられません。其れに又是も怪むべきでは有りませんか、渠は何故夜分殊更に日常衣を着したものでせう？靴は何うして一足庭上に落ちて居つたのでせう？是等の諸點が即ち渠に嫌疑の懸る所以で、若渠をして何事も知らぬ罪なき者と断定するならば、然らばシヨウは何處に居りませうか？此種の少

年の悪徒共は皆巧妙に世人を欺いて居ります。若彼奴等の詭計を貴女が御承知になつたなら眞に其人を欺くの巧みなるに一驚せらるゝことゝ存じます。」

「ですけれど」

と、私は巡査の言語を遮つて

「シヨウに限つて那麽ことは有りませんと思ひます。渠をば疑ふのは餘り酷です其れあシヨウの何處へか行つて見ないのは事實でせう。が、併し程なく屹度歸つて参りませうと思ひます。或は賊を捕へやうと思つて、其後を追駈けて行つたのかも計られません。其際に靴を庭に落したのでは有りますまいか。」

「夫人、何うしても然うは受取れません。」

と、巡査は現場の状況が明白にシヨウの犯罪を證據立て、餘りあるを説き、而して猶私が其れに就いて全く無智であるを哀れむやうな一種の笑を浮べて、

「今一步譲つて、シヨウが賊共を捉へやうと其後を追跡したものと假定するならば、

シヨウは必ず高聲に叫んで賊徒を呼止めたでせうに、其音聲の聞えなかつたは不審の一つでは有りませんか？ 又賊徒の方から考へて見ましても、彼等自分達が使用した梯子を隣家の庭に投棄する前に、シヨウをして共に其れに上らしめた云ふことは到底有り得べからざることでは有りませんか。ねえ、夫人。斷じて左様なことは致さぬで有りませう。私は夫人が然く善意に推量なさるを否定することは貴女に對して如何にもお氣毒に感ずるのです。が併し私の淺薄な鑑識ではシヨウは最も巧妙に人々を欺き果せた悪少年で、今度の事件は餘程久しい以前から企圖して居つたのを、巧みに今日まで押隠して、少しも色に顯はさず、日々實直を粧うて窃に時期の至るを待ち、今曉稍く其目的を實行し得て、仲間と共に身を隠したものと察せられるのです。私は此賊徒の探偵の見込みが略ぼ付きました。程なく此悪少年を捕縛するでせう。渠の名はシヨウ、コールと承知しましたが、若渠が果して私の推量通りで有るならば、貴女はシヨウに付いて御存知の所を一切明

白に一つ御話を願ひ度いものです。何方から渠を御雇入れになりましたか、渠の性質行爲は奈何様であつたか、其邊逐一御話下さるなら探偵上大に便益を得まするのです。シヨウさへ捕縛致せば、殘餘の仲間は造作なく續いて縛に就きませうと、思ひます」。

と、シヨウの犯罪を主張致しました。

無論私はシヨウに付いて見聞した一切を隠さず仔細に物語りました。が私の心中には何とはなしにシヨウは多分數分時以内に歸邸して、自分で其不在であつた理由を辨明するやうに思はれ、ボギイも亦たシヨウと一緒に歸り来るやうな氣がして居りました。全休シヨウは何故でボギイと共に連れて行つたのでせうか？ 巡査は次のやうに判定しました。

「犬が多分シヨウの跟を追つて往つたので、自分達の行方が犬から露顯するを怖れ、其れを拒ぐ爲に一緒に連れて逃げたものです」。

一切の取調も全く済みました。其後は家内が妙に閑然として了ひました。前夜私共は「御寝みなさい」と挨拶して各自寢室に退きましてから、早幾日も經過たつやうな心地が致しましたが、實際は未だ稍く一晝夜を過した斗りなものでした。此二十四時間が甚麽に長く思はれましたでせう！ 私共は器具を調べて大分數多く盜まれたのを發見致しました。シヨウの正直を深くも信じて疑はなかつたウイルソンは終に憊う思ひ始めました。シヨウは憫れにも賊共の爲に恐怖の念を喚起されたのであらう。シヨウは日頃自分が是等の器具を取扱ふことを大に誇りとして居りました。處が今不圖も睡眠つて居た中に其大切な管理品を賊徒に盜み去られ、而して後に稍く此災難を發見したので非常に驚いて途方に暮れ、自分は此の爲に屹度厳しく叱責らるゝことゝ一圖に思込んだのであらう。で其叱責らるゝことを怖しく思ふの餘り、前後の思慮もなく無斷に實家に逃歸つたのであらう。而して父や兄とも相談して、兄から自分の爲に辨解して貰つての上で、邸に歸つて來るので有りませう。

ウイルソンの此臆測には成程是れは然う有りさうなことで、私も同意されました。シヨウは自分に托された器具を盗まれたなら、甚だに強く自分を責るといふことは、私も兼て渠の性質から見抜いて承知して居りましたからなので、私は直に渠の父に電報を打つことに決めました。が餘り父を驚かさぬやうに「シヨウハオタクニキマスカ、カヘツタトオモウワケアルカラヘンマツ」と手軽く打ちました。斯くて二三時間を経て「コヌコンヤニモキタラスグシラスアヤマチナキラインル」と返電が達きました。彼處は邊鄙な文通不便の小村なので、慥う往復に手間取れたのでした。

私共の臆測は相違しました。シヨウは多少の金子を所持して居りましたから、若實家に行かうとなら汽車の便を借られるのでした。然すれば僅に二時間の後には到着される土地ですから、最早儘に帰宅して有らねばならん筈ですが、今以て歸らぬと聞いては私共の推量は全く外れて了ひました。

此夜は家内一同殆ど一夜を坐つて明しました。偶々眠つた者も安樂椅子或は眩懸椅子などに凭れて窮屈さうに僅に居眠つた位で種々の配慮や、前夜の大騒動や、恐怖やらで身体は疲れ切つて居ましても、心が落付きませんので、誰人も臥床に這入り得ないのでした。尤も宵の間は役人、探偵など入交り立代り来て、賊共の出入した場所を検べ、盗れた品数を調査し、シヨウの身許、性質、行爲など一切を質ねて書誌し、而して警察本部から各所の警察署を始め倫敦市外數里の地方に迄報知したりして混雑して居つたのでした。シヨウは遂に二十磅の懸賞で其行方を探索さるゝことになりました。私は渠が悪漢等と同じく賊の汚名を衣せられて、行方を尋ねらるゝと聞いて實に痛心に堪へませんでした。

年老いたシヨウの兩親は是れを聞いて何と思ふでせう!? デックは甚だ感情が致すでせう!? デックの良き教訓と注意深い指導に依つて、シヨウは假令種々の嫌疑が身に罹つたにせよ、其れにも拘らず私が渠を全く善良の少年と信じて疑ひません程善

い少年と育て上げられたのでした。次の日も私には猶シヨウが歸つて来るやうに思はれました。私はシヨウの寢室と定めた階下の小室を見舞ひましたが、室内はウイルソンの手で早くも整然と取片付けられて、寢臺には洗濯した敷布毛布など打被せられ、何時シヨウが歸つても直ぐ臥されるやうに一切落ちなく用意されて有りました。で眼に入る種々の物品がシヨウの愛らしい温順の性質を一層深く惚ばせました。横手の壁にはシヨウの寶とした物品が排べ置かれた二三の棚が吊つて有つて、其一段にはセメントの塚と駝駱の毛の刷子とを白の古半巾に包んだものと、盆に載せられた小さい花瓶とが載せて有りました。此花瓶は私の秘藏の品でしたが、或時姪がボギイに戯れて遊んで居りましたうち、過つて臺の上から落ちて破して了ひましたのです。私は其破片を拾ひ集め集めて、彼は二十片餘り有つたのを根氣よく糺合せやうと試みましたので、姪達も共に手傳つて、私よりは一層氣長に繕いました。が此方を糺せば彼方が離れ、怎うし

ても工合よく出来ませんので、終に駄目と斷念めて、シヨウに捨てよと吩咐けました。で私は疾くに塵箱に投入られたものと思つて居りました。處が思ひ掛けなくも、二三の極々小さい碎片を除いた外は悉く丁寧に糺合せて美事に繕ひ上げられ、而して茲に飾つて有るのでした。這麼に立派に繕上る迄には定めし多くの時間と非常な忍耐とを要したことでせり。私も姪も忍耐が足らなかつた斗りに骨折損を致したので、今更シヨウに對して恥して次第です。が一体シヨウは勞力して働くことが天性好きなので、仕事に倦きたと云ふやうなことは曾て無いのでした。多分シヨウは此花瓶の修繕が出来上つた曉には、平生是れが飾られて有つた場所に窃と持つて来て、私に其れに氣の付くまでは無言つて飾つて置き、頼て私の眼に止つた時にシヨウは妙な科をして「夫人、失禮ですが、貴女は花瓶が碎れたのを残念に思召て被居いませうと存じて、下手ですけれど私の繕つて置きました」と恚う言ふ積りだつたのでせう。で私が一言二語禮謝を言つて褒めて遣れば喜んで満足して、

顔面を赤めながら莞爾々々して急いで室を出て行くのでせう。火爐蓋の上にも幾多の寶物は飾られて、其中にシヨウの性情を表した安價の寫真が四五枚有りました。其の一葉は小羊を肩にした大牧者の宗教寫真で、私は是を見て我知らず首を垂げ、目下行方の知れぬシヨウを何處からか探し出して、無事に邸に歸して下さるだらうと信ずる同じ善牧者に衷心から默禱を捧げました。其所に又幾個かの小石が有りました。是れはシヨウが當邸に参つた一年前に一日兄デックとマールゲートへ遠足を試みて其の紀念に拾ひ歸つたものなので、シヨウは此石を正眞のアジフス（メノウの一種）と信じて居りました。而して程なく石を磨いてウイルソンに耳輪と襟留とを造つて與へる約束がして有つたのでした。是等の品の他に私の極昔風の大古寫真も有りました。是は私が曾て眞二つに引裂いて屑籠に捨てた品なので、其れが意外にも丁寧に繕合されて安價の寫真匡に嵌められ、而して茲に飾られて有りました。シヨウは匡を一個しか持つて居ないので熱

考の末、先づ第一に尊敬ふべきは女主人公の寫真と思つて憊う爲たので有りませうか。私は室内を見廻して言ひ知らぬ悲しい思ひに打たれました。世間の人々は僅が僕に殊に下賤の給仕子僧に關して、私が憊うまで心痛するとは笑止の至りと、お笑ひになりませう。笑度くば御遠慮なくお笑ひ下さい。が今若貴方御自身がシヨウの此時に於ける如うな位置に御身を置かれたなら如何で有りませうか。渠のやうな貧乏下賤の者で、而も其時其場の事情が悉く自己に反對して居るといふ場合に、其處に貴方を信ずる四五、或は二三の友が有つて、私共のシヨウに對するやうに貴方に味方し衆人は如何に嫌疑を懸くるも、猶貴方を信じて其冤罪を主張するなら貴方は怎う御思ひなされませうか、其れを承り度いものです。私は何うしても不憫のシヨウに程なく再會し得らるゝやうな感が致すので、渠の室に燈火を點けさせ、室内を暖く快くなし置くやうにメリーに吩咐けて居室に戻りました。

賊の騒動以來何人も碌々眠らないので、此夜は一同早く就寝すること、致しました。折柄何人か案内鐘を鳴しました。が其打方が奈何にも静で宛ら案内を乞ふには此鐘を鳴したものと危みながら、恐るゝ敲いたやうに聞えました。

「多分シヨウが歸つて来たのでせう。」

と姉は申しました。が私はシヨウならば鐘は鳴らさぬと思つて居りました。頓てメリーが取次に出た様子で、客の質ぬる聲が聞えました。

「アイマール様のお邸は此方様でムいますか？」

「唯、當邸でムいます。が唯今御主人は大陸へ御旅行中で、お留守なのでムいます。ですけれど夫人は御在宅で被居いますから夫人なら御面會が協ひますが。と、メリーは答へました。其後猶一二語言葉が替されたやうでしたが、小聲で聞取れませんでした。間もなくメリーは私の許に參つて、

「夫人」デックと云ふお人が見えられて、シヨウの兄だそりでムいます。夫人にお

目通りが致し度いが如何でムいませうかと申しますので。如何致しませう？」

「ア、左様かへ。では直ぐ此室へ通して下さい。」

善良で高尚で眞に稱讃すべき人物と深くもシヨウに尊敬はれ、其理想とさへされた渠の兄デックは待間もなく私の面前に顯はれました。私は兼て胸中にデックは背丈の高い、肩巾の廣い、而して表情に富んだ、日に焦けた顔面した立派な青年であらうと思つて居りましたのです。處が今初對面の眞のデックを見ますれば全く豫想外で、髪の毛の柔順に黒い、顔色の蒼白い、一躰に瘦せて狭斜な見るから弱々しうな青年で、片手に帽子を持ち、伏目勝に其處に立つて、挨拶するさへ怯し氣な様でした。

私は少しく前へ椅子を進ませて。

「サア、遠慮なくズツと此方へ御這入りなさい。御前さんがデックさんかへ。初めて會ひます。アノ何ぞシヨウに付いて好い便りがありましたか？ 今度の出來事に

村^ついては私^{わたし}始め家^{うち}内^{うち}中^{ちゆう}がシヨウの身^みを案^{あん}じて、一^ひ方^{かた}ならす心^{こころ}を痛^{いた}めて居^かるのです。私^{わたし}共^{ども}は一同^{いっとう}シヨウの信^{しん}實^{じつ}の友^{とも}なのです。此^{この}心^{しん}配^{はい}に付^ついちアやお前^{まへ}さんも亦^{また}た私^{わたし}共^{ども}を友^{とも}達^{たち}に爲^しなければなりません。シヨウにお遇^あいですか？」

私^{わたし}の此^{この}言^{ことば}葉^はにデツクは稍^{やう}く俛^{うな}首^{なだ}れて居^かた顔^{かほ}面^{めん}を上^あげたので、唯^{ただ}今^{いま}述^のべたやうな容^か貌^{ぼう}を見^みることが出^で來^きたのでした。若^{もし}信^{しん}實^{じつ}で、尊^{そん}敬^{けい}すべき、而^{さう}して慈^じ悲^ひ深^{ふか}い心^{こころ}が人^{ひと}の精^{せい}神^{しん}の窓^{まど}から窺^{のぞ}いて居^かるとするならば、デツクのは確^{たしか}に其^{その}大^{おほ}きな碧^{みどり}色^{いろ}の眼^めから現^{あら}れ
て居^かるので、其^{その}眼^めはシヨウの其^{その}れに生^い寫^うしてした。が只^{ただ}牝^め毛^けの黒^{くろ}いのが些^{いさ}か調^{てう}和^わ
しないやうに思^{おも}はれました。

「夫人^{おくさま}、有^{あり}難^{がた}う存^{ぞん}じます。御^ご親^{しん}切^{せつ}な其^{その}お言^{ことば}葉^はに依^よつて神^{かみ}様^{さま}は貴^{あなた}女^な様^{さま}を御^お祝^め福^{ふく}下^{くだ}さ
います。」

と、デツクは答^{こた}へて、私^{わたし}が其^{その}言^{ことば}葉^はを遮^{さへ}る前^{まへ}に、私^{わたし}の膝^{ひざ}下^{もと}に平^{ひら}伏^ふして、嘘^{うそ}り上^あげなが
ら私^{わたし}の手^てに接^{せつ}吻^{ぶん}致^{いた}しました。で稍^{やう}く起^た上^あつて、背^{うしろ}後^ごの椅^{いす}子^すに手^てを挂^かけて感^{かん}情^{じやう}に震^{ふる}へ

る身^み躰^{たう}を支^さへながら、

「夫人^{おくさま}、御^ご免^{めん}下^{くだ}さい。這^{こんな}麼^な御^ご無^む禮^{れい}を致^{いた}して、誠^{まこと}に恐^{おそ}入^れることでもしいますが、何^{なん}卒^{そつ}お
宥^{ゆる}し下^{くだ}さいまし。私^{わたし}は新^{しん}聞^{ぶん}でシヨウに付^ついての一切^{いっさい}を承^{しょう}知^ち致^{いた}しました。又^{また}世^せ間^{けん}で
はシヨウを恚^こう思^{おも}つてるかと云^いふことも分^{わか}りました。失^{しつ}禮^{れい}ながら私^{わたし}は夫人^{おくさま}も矢^やッ
張^はり世^せ間^{けん}の人^{ひと}達^{たち}のやうに、貴^{あなた}女^な様^{さま}が是^{こゝ}迄^{まで}シヨウを深^{ふか}く御^ご目^めを挂^かけて御^ご使^{つか}い下^{くだ}さい
ました其^{その}御^ご恩^{おん}を仇^{あだ}にして、賊^{ぞく}を働^{はたら}いて逃^にげた憎^{にく}い奴^{やつ}と思^{おも}召^めして被^か居^ゐることだら
うと存^{ぞん}じまして、實^{じつ}は御^ご邸^{てい}へ參^ま上^あつて御^ご目^め通^{つう}を願^{ねが}ふのを耻^{はづ}敷^{かし}く思^{おも}つて居^ゐりました
のです。夫人^{おくさま}、私^{わたし}は心^{こころ}中^{ちゆう}に思^{おも}つてる所^{ところ}を逐^{しゆ}一^{いつ}打^{うち}明^{めい}けてお話^{はなし}いたします。シヨウは
生^うれてから今^{いま}日^ひ迄^{まで}に只^{ただ}一^{いつ}度^ど虚^{うそ}言^{ごん}を申^{まを}しました。其^{その}時^{とき}私^{わたし}はシヨウを手^て酷^{こつ}く折^{せつ}檻^{がい}致^{いた}
して、彼^かが泣^なき叫^きぶので、私^{わたし}の心^{こころ}も傷^{いた}んで破^{やぶ}れるかと思^{おも}ふ位^{くらい}嚴^{げん}しく叱^{しか}りましたで
すから正^{まさ}可^かにシヨウが盗^{ぬす}みして逃^にげ去^まらうとは私^{わたし}には思^{おも}はれませんのです。私^{わたし}は
自^じ分^{ぶん}の心^{こころ}が、若^{もし}シヨウが賊^{ぞく}を働^{はたら}いたと信^{しん}ずるやうなら、寧^{むし}ろ親^{おや}父^{ちち}の古^{ふる}鐵^{てつ}砲^{ぱう}を採^と

つて吾れと自分を成敗して了ひます。何故なら那麽心なら實に残酷極る人間で、此世に生存て居るに適せぬ者と存じますからです。私は夫人もシヨウを疑つて御出でのこと、存じて居りましたに、夫人は猶且彼を御信用下すつて、決して盗みしたとは思はぬ、何處までもシヨウの信實の友だと、有難い御心中を承りました、私は實に嬉しく忝く存じます。世間には未だく善良人も多く、其處に恩恵も正義も有りますれば、亦た夫人のやうなお慈悲深い御方様も有ることを知りまして、此一件に付いて最初に考へました程、左迄悪いこと斗りでもないといふ始めて悟りました。

「マア、其れへお掛けなさい。少し落付いてから、其れから何とか好い方法を考へませう。私が彼の騷動の折の模様を悉皆り話しませう。然うしたらお前さんはシヨウの性質動作萬端熟く知つてお出でだから、那麽場合にはシヨウは怎ういふ處置を取るだらうかと、其邊から考へたなら、或は何とか手蔓を見出せるかも知れ

ません」。

デックは椅子に腰を下ろし、最早女々敷涙を流すまいと思つてか顔面に手を當て、兩眼を掩ひ隠し、而して私が彼夜の怖しかつた出來事の始終を語る間、黙して靜に聽いて居りました。で話し終つた後も猶少時は無言で沈つと思案して居りましたが、頓て落膽した様子で、額に手を加へて、

「模様を伺ひましたも何とも思案が附きません。實際思案に餘ります。此事件に付いては私は全然暗黒に迷ふばかりで、怎うして良いか、少しも前途が見えませんが私の取るべきことは先づシヨウの行方を搜索することです有りませうか。私は然う致さうと存じます。シヨウが生存てさへ居りますなら、私は屹度探出して、自分に其事情を明白に語らせます。私はシヨウに些少の過失もないとは思ひません。が過失を致したなら假令其事柄は甚麼に小さくとも亦た甚麼に大きくとも或は其れが何事であらうと、シヨウは屹度隠すことなく正直に白狀致しませう。其れが

彼子の當然爲べきことなのです。私は平生熱く、然う言聞かせて置きましたから、シヨウは必然左様致しませうと信じます。此一事は私が自分の生命を賭けても保証いたします。私は今晚はメレイボン街の叔母の家に泊る積りになつて居りますから、其處に一泊して、而して叔母の所夫は巡査を奉職して居りますで、篤と叔母夫婦にも話して相談もし、智慧も借りることに致しませう。私はシヨウが盗みせぬこと丈は認めて居りますが、何故歸つて事由を話さないのか、其れが一向に分明ません。兎に角行方を探しませう」。

私はシヨウの年老いた父母が此の不慮の出来事に付いて甚麼に心配もし、悲しんでも居やうと、其安否を問ねました。

「親父は私と一緒に出て参りましたが、既う殆ど發狂せん斗りに心配して、唯だ阿母に此事件を知らさない迄に稍く耐へて居る丈でムいます。目下阿母はリヨウマチで床に寝て居りますに、加之に心臓までが大分弱つてますので、若此の一條を

聞かせて驚かしたなら、或は急劇に變が來ぬとも保合れんから、隠して一切知らせぬやうにと、醫者の注告もあるのです、旁々阿母は未だ何事も知りませんのです。シヨウは季子でもあり、性質も御存知の通り温順く、可愛げな所もあるので、阿母は特別可愛がつて居りますやうな次第で……」

デックは茲に至つて感に迫つて何も言得なくなりしました。で私は彼にウイルソンの許に往つて何品ぞ興奮するやうな食品を食してから歸るやうにと申したので、デックは椅子を離れて、宿に歸つて巡査なる叔母婿に相談し、翌朝早く又當邸に來て其談話の模様を語ることを約して階下へ立去りました。

デックの歸り行くど入り替ひに又何人か訪ね來たと見え、立關前に馬車が止つて、今度は案内鐘を強く大きく鳴しました。時計は恰度十時を報じました。此夜も今は早寝も覺束なくなりました。忽ち聞慣れた聲音が聞えましたので、私は驚いて居りますと、メリーがローリング博士の來訪を報じました、博士は良人の古き親友で、

既に以前に記載いたした人ですから諸君は御存知でございませう。博士は恰度私の滅入つた重い心を引立て、軽くさせるやうな快活な晴やかな調子で、

「夫人、今時分、這様に遅く参室つて、吃驚りなさいませんか？」

「唯、吃驚り致しましたとも。實際驚きましたよ。けれど眞個に好く入来して下さいました私は眞に嬉しいのでございませう。貴方は何時入来しても大喜びでお迎へ申上げますのですけれど、今晚は又特別にお嬉しく存じますの。少々心配な事件が起りました、家内中悲んで居りますのです。マア何卒其れへお掛け下さいませ。而して暫時御談話なさつて下さいませんか、御迷惑様ではございませうが御願ひ致します。」

「左様ですか。では一時間許り喜んで御談話致して歸りませう。が併し少々持参した品が馬車の中に置いて有りますから、先づ其品を家内に納れませう。私は唯今

デボンシャイアに着いた許りで、直ちに御宅へ参上つたのです。其れで彼處の林檎を、一籠は貴女に、一籠は家内にと、二籠土産に買つて、馬車に一緒に乗せて参つたのです。實は其れが爲に這様に遅く出ましたやうな理由で。歸路に當邸へ寄途をして、林檎をお渡して参つても、僅十分位しか費らんですから、御迷惑だらうが、今晚御訪ねして、明日使の者に持して態々御届けする面倒を省かうと、恚ういふ勝手な考へから、無遠慮にも今頃参室したやうな次第で、甚だ恐縮です。」

私は呼鈴を鳴してメリトを呼び、博士は林檎の香氣の二階に通ひ來ぬ場所に置くやうにと、メリトに注意されて、而して恚う言はれました。

「適度く熟した新鮮な林檎は朝餉の後とか、或は割籠など使つた時には、水分が多くて却々美味な物ですが、併し是れを室内に閉込んで置かれた時の香氣と來たら實に鋭くつて其れあ堪つたものぢやありません。眞に恐るべき香氣です。」

ウィルソンが何處ぞ床下の室の相當の場所に仕舞つて置きませう。私共は其室の半分も使用つて居らんですから。」

と私は答へました。

其處で、私は客人を暖爐の側の眩懸椅子に請じて、樂に其れに凭らせ、側には博士の嗜好なコ、ワのコップを供へて置きました。時に博士は口を開いて、

「サア、夫人、賊共に這入られた、當時の模様を承りませう。夫れから甚麼點からして暫時私が貴女を保護するやうにとの御所望を受け、亦た貴女の蒼白い頬に幾分の色を回復させましたのですか、其邊をも伺ひませう。時に子僧さんが怎う致したのです？ 其子僧さんと云ふは日外夜中に給仕法の一人演劇を演じた彼の面白い珍らしい少年ですが？ 私は滅多に人相に依つて人を誤つたことは有りません。彼の少年は必ず正直な善良者だと思ひます。私は……。」

私は此時博士の言葉の腰を折つて、

「左様でいます。彼の少年なので、ですけれど只今私が残らずお話申上げて了

ひます迄お待ち遊ばせ。其れから貴方は……。」

と僅に事件の緒を語り始めた斗りに、忽ち階下から夫れは物凄、何とも言へない叫聲が續けざまに聞えて参りました。而して其叫聲が一叫毎に高くなつて、非常に恐怖の色を帯びて居りました。姉は先刻自分の寢室に退いたのでしたが、此時又此室に走つて来て寢支度した娘達も寢衣姿の儘で「叔母様々々々」と呼ばはりながら母親の後に追絶つて参りました。

「即刻の氣魂しい叫聲は何でせう！ 何誰が叫んだのでせう？ 何事が起つたのでせう？」

互に顔見合して怪んで居りました。折柄メリーは幽靈のやうな蒼白い顔色して、此室に参りまして、眼計り跳らせながら喘ぎく「カスれた聲音で、

「夫人、お早くお出で遊ばせ。お早く。彼の子が見付りました。ジョウが、こ、こ、

殺されて居ります。咽喉、咽喉を斬られて、穴倉に倒れて居りました。ア、恐怖しい！」

と言つて、彼女は亦た叫びました。

博士は私の身軀を捉へて引戻さうとされましたが、私は其れを振切つて室を走り出て、飛んで階下に参りました。臺所は眞暗黒で何人も居りませんで、地脚の方に燈火が見られましたので、直ちに其處に参りました。博士も亦た私の後を追うて同じく茲に來られました。

穴倉の入口の戸は開かれて、其所にウイルソンと博士の馭者どが立つて居りました。ウイルソンは私の姿を認めると直ぐ慍う申しました。

「アラ夫人、茲へお出で遊ばしてはいけません。貴女の御覽遊ばすものでは無いませぬ。ローリング様、どうぞ夫人を彼方にお連れ遊ばして下さい。夫人などが御覽になつてはいけません。」

「何う爲ました？ メリーがアノ……」

とまで私は叫びました。が餘は言ひ得ませんで、無言にウイルソンの手から手燭を取つて、穴倉の中に這入つて行きました。親切な博士も他の燈火を手にして、私の傍を離れずに共に進まれて、二人は燈火を便りに室内を見廻しました。遙か奥の片隅に毛布包物のやうなもの、中から此方に向けた首のみが顯はれて、而して恐しい紅の血潮が啓いた口から迸り出たやうに、其頸の周邊に一條の川を爲して居るのが、眼に入りましたので、猶二三歩近寄つて熟く視ました處、其れは眞にシヨウで有りました、可哀さうにシヨウは荒縄で緊く繋り上げられ、口には渠が平生穿いて居た例の眞紅の靴下で、堅く猿轡が箆まされてありましたので、恐しき血の流れと見えたのは此靴下で斬られたので無かつた丈は眞に謝すべきことでした。勿論渠は絶息して居りましたが、慘たらしい斬殺を免れたが、未だしもの心遣りでありました。

博士は直ちに慘酷な猿轡を取捨て、温良さうな馭者男も亦た私共に同情を表して、博士に手傳うて手早く其繋繩をば切り放ち、二人して哀れのシヨウの小さき形骸を引起して抱上げました。時に毛布の中から重さうに床の上に墮ちた物が有りました。見れば不惑の最後を遂げたボギイの死骸で身軀中に受けた數箇所の突傷は何れも致命のものでした。

此折にも役人達は大勢参りまして巡查は現場の模様を詳細に取調べました。

此一事で事件の真相は始めて明白に了解されました。賊共は慥に先づシヨウの室に這入つたので、シヨウの腕に抱かれて居たボギイは其れと知つて烈しく吠立て、シヨウを起したので、爲に無慚にも賊の刃に二度三度突刺されて、敢なくも再び吠へ得ぬものとされて了つたので有りませう。而して猿轡と繩とがシヨウをも同じ運命に陥れました。

賊の一人が臺所の窓から私の姿を認められた時に彼は加勢の者の來るを悟りシヨウの口から自分等、容貌風體の彼等に知れんを恐れ、急いでシヨウを捕へて寢具も衣服も一緒に引括んで、若私共が幾日も氣附かずに過したなら、餓死して了ふやうな穴倉に押籠めたものと思はれました。

賊共も正耳にシヨウを殺さうと迄は思はなかつたので有ませう。私共が平生穴倉を使用して居つたなら二三時間の後か、或は其れよりも一層早くに渠を見出し、得たのでせう。が、穴倉の位置は恰度往來の下で、室内も私共には少しく廣過ぎますに、且つは食品貯藏室の中に石炭庫も設けられて有るので、差して必要もない處から不幸にも滅多に使用致しませんでした。夫れ故戸締りも普通の掛鐵で無造作に閉して有つたのです。

シヨウを罪人として搜索する人々の心中に多少疑惑の念がありましたなら、或は仔細に穴倉までも調べたでせうが、私共の外は何人も最初からシヨウを賊の仲間と見做して其夜彼等と共に逃亡したものと斷定して居つたので、穴倉までには一向に考量

が及ばなかつたのでした。

で此夜ウイルソンが林檎の香氣を避くるには穴倉が究竟と考へたので、何の氣なしに其處の戸を開けました。スルと奥の一隅に包物めきたる一物が置かれて有るので、怪んでメリーに調べさせました所、何ぞ知らん其れはシヨウで有つたので、二人は驚愕の餘り、私共が二階で聞いた、彼の怖しい叫聲を思はず舉げたので、殊にメリーは恐怖しさに殆ど狂氣の様になつて、穴倉を飛出たのでした。却説哀れのシヨウはローリング博士と取者どに抱かれて、手早く客室の暖爐の前に移され、其處の粗毛氈の上に臥かされました。私は勇氣を出して其變り果てた顔面を視て、

「マア、眞蒼白なこと！ 這麼にグタリとして了つて！ 是れがシヨウでせうか！」
 ローリング博士は小さき遺骸の側に坐つて、高手小手に縛られた儘に曲つて、早硬くなつたシヨウの手を頻りに押し摩擦つて居られました。で私は、
 「博士、何を遊ばすのでいますか？ 最う何共致方はいませんでせう。其麼に手

を盡しても到底蘇生の希望は無いままですまいね！ 眞個に不愼なことを致しました。全く自分の職責を盡して殺されて了ひました。」

と言ひながら、同じやうに其處に坐つて、冷へ切つたシヨウの手を取つて歎きま

「オ、シヨウや、眞個にお前は勇しい強い子だつたね！ 可哀さうにお前を偽善者だなんて、何人が那麼ことを言はれませう！ お前を疑つた人達が涙なしにお前を見る事が出来るなら、ねえ、此傷ましい憫れの姿を其人の眼前に見せ付けて遣り度いものです。」

「夫人」と博士は突然呼掛けられて問はれました。

「御宅の浴室には何時でも熱い湯が有りませうか？」

「唯、御座いますよ。ですが何故左様なことを御質ね遊ばすのです？ 萬死に一生の希望があると思召すのでいますか？」

私は憊う間ひ反しながら、シヨウは一個の僕、貧乏下賤の給仕人であることなどは一切忘れて、彼の頭を自分の腕に抱き上げました。只今私の記憶に残つて居るのはシヨウの顔面を自分の胸に轟と押當て、後年神から授けられた自分の子供等と呼んだやうに、有らゆる可愛の者の代名詞を以て渠を呼んだこと、生命の有難い希望の光りが辛くも見え初めて来た嬉しさの餘り、蒼白い額に、接吻したことで有りませう。

シヨウを二階に連れ行きます。誰れも彼れも進んで手を貸しました。ウイエルソンは博士が此小さい軽い身軀を二階に移させました。以前に大盥に湯を満して其處に置き、凡ての用意を落ちなく致して置きました。

「五六滴のブランドデーで先づ口唇を濡し、其れから湯で五躰を温めて軽く摩擦するのです。然うしたら呼吸を吹返させよう」と博士は言はれました。

此度は親切な姉の看護が計り難いほどの大功を奏しました。此夜は終夜私共は死と云ふ恐しい大敵と一寸の地を争ひました。善良な博士は少しも倦れずに、既に幽冥の境に足を踏みかけた者の生命を二度呼返へさうと、熱心に手を盡されました。賊共は幸にもシヨウの身体を毛布に括んで置いたので、彼の生命の極めて弱き一縷の綱を此時まで辛ふじて保ち得たことに、知らずして大きな助けを與へました。彼等は疑もなくシヨウが暴れても音響の聞えぬやうにとの用意から憊うしたので有りませう。が包まれて有つた計りに、石の床に直接に身体が觸れなかつたので、爲に凍死を拒いで、僅に蘇生の機會を與へられたのでした。

私は博士が一籠の林檎を惠與されたのを甚麼に深く感謝いたしました。若此事が無かつたなら穴倉の戸を啓ける機會もなくて、シヨウは夜の明けぬ間に飢死して了ひましたでせう。若然うであつたなら、何と其れは恐しい最期でありましたらう。僅か數歩の近き所には暖氣もあれば食物もあり、而して彼の姿の見えぬのを甚

く案じて悲んで居る温き心の人々も居るものを、渠は一人冷たい眞暗黒な室に、其の生ながらの墓所の上を西に東に往來する人々の蹙音を聞きながら、飢渴の苦痛に幾十時間を甚麼に惱んだで有りませう！三日間を恐しい暗黒の中に過し、終に全く弱り果て、知覺を失ひ、其爲め却て凡ての苦痛を忘れる迄に到つた、此長時間を、彼は定めし幾週間も経たやうな心地がしたことでせう！

朝も大分進んだ頃ジョウの眼瞼は遂に動いて、微に細く開きました。私はジョウが長時間を暗黒に押籠められて居たを思ひ、注意して室内を薄暗くして置きました。此弱い光線さへ未だ強過ると見えて、又忽ち閉して了ひました。けれど一瞬間の此一目でジョウは儘に私を認め、物言ひ度げに口唇を動したので、私は俯向いて、彼の口に耳を附けました。其時ジョウは衰へ果てた虫のやふな細い聲で微かに申しましたが、其微けき眩も私には明白に聞き取れました。

「夫人、私は何う致すことも出来ませんでした。何卒お赦し下さいまし。」天に在し

「ます我等の父よ」とお祈り下さい。

私は跪坐して、堰き来る涙に、祈る言葉も四途路に途切れ々々で有りましたが、其れ丈熱誠に簡單に神の御座にまで叫びました。此間博士はジョウの脈搏に注意し、姉はジョウの物欲しげな様子に其の色もない口中に滋養品を一滴二滴と折々滴し入れて居りました。時に博士は急に恚う言はれました。

「夫人、貴女は此少年の兄が倫敦に来て居ると仰有いましたね？」

「左様でムいます。ですけれど今朝早く邸に参ると申しましたので、番地も名前も聞いて置きませんでした。」

「左様ですか。其れなら宜しい。恰度其時刻位には來ませう。」

「時刻とは？え、何の時刻なのでムいます？ジョウは最う六ヶ敷いのでムいますか？何とか致方はムいませんでせうか？」

善良な博士は露を宿した眼でジョウの蒼白い顔面を凝ツと視入つて、悲哀を帯びた

調子で、

「最早奈何とも術の施しやうのないのを私は恐れます。が若し即刻其兄が見えたら、非常に兄を愛して懐しがつて居るといふお話ですから、或は兄を見て心が引立てられ少時は保つかも計られませんか。シヨウは只今ズン／＼と衰弱しつゝ有るのです。最早私には手の盡しやうがないので。既に全く人力では如何とも致方のない時期にまで進んで居るのです。けれど愛と神の御祐けとに依ては九死に一生を得られやうかと思ふのです。何しろ可憐の至りです。眞に立派に自己の職責を果したので、人の羨むべき義務を全うして倒れたのです。が併し私共此のやうな少年は願くは長命へて、他の模範となつて呉れるのを寧ろ希望するのです。折柄室の入口の扉が微かな音を立てたので、私は振り返つて見ますと、其處にデスクが口を結んで、眼に物を言はせて立つて居りました。私は直ぐに寢臺を指して「静寂に」と低聲に知らして、手眞似で室内に入ることを告げました。」

デスクは最愛の弟の變り果てた姿を一目見て、餘りの驚愕に心の激動を抑へ切れず、ムラ／＼と湧いて来る悲しい思念に、慄へかねた熱涙は双の眼から自然にハラ／＼と溢れ落るので、遂に其處に坐つて、兩手を顔面に押當て、少時男泣きに泣きましました。けれど流石男の一分時程して稍く涙を收めて立上り、シヨウを吾が腕に抱き上げて、愛を籠めた柔しい溫和な聲音で、

「シヨウや。シ坊。兄さんが来たよ。サア、デスクの顔面を見てお呉れ。ねえシヨウや。御前は兄さんを忘れたのかへ？お前を可愛がつた兄さんにお別れもしないで死んで行くくんぢやアないよ。」

此時シヨウの口元に微かな笑の色が浮んで、碧色の眼は又もや開かれました。而して糸より細い音聲で、

「兄さん。俺、談話が、爲、たい、け、ご、口、が、利、け、な、い。俺、忘、れ、や、し、な、い。兄さんが、甚、麼、こ、と、で、も、過、失、を、し、た、ら、直、ぐ、白、状、し、な、

よ、と言はれた、た、こと、を、何時、でも、記憶、で、居、ます。兄、さん、接、吻、して、お、呉、れ。神、様、夫、人、を、お、恵、み、下、さい。兄、さん。阿、母、さん、の、處、へ、連、れ、て、つ、て、お、呉、れ。」

シヨウは恚う言つて、小さき溜息を、洩しましたが、其儘深い睡眠に落ちました。此睡眠は地上にては最早二度とは覺醒ぬものであらうと、私共は恐れたので、一同身動きさへしないで、靜にシヨウを見守つて居りました。

其日の午前中デックはシヨウを抱いた儘で居りました。正午に間もない頃、博士は二度シヨウの手を把つて、微弱ながらも此時まで打つて居た脈搏を算へられたが、忽ち其善良な親切な顔面に笑が上つて、私に耳語れました。

「希望が有ります。」

「ア、有難いことです。」

と、私も亦た囁き返して、而して直ぐに自分の室に走つて往つて、其處に全能の神

に一度は危く失はれんとしたシヨウの生命を緊急止めて二度私共に返して下された神恩の忝きを涙ながらに深く感謝いたしました。で私が亦た病室に戻つて來ました時には恰度シヨウの眼の醒めかけた處で、シヨウは最愛のデックの顔を見上げながら低い聲音で、

「アラ、兄さんだね！俺のことで泣いてるの？え、兄さん。最うお泣きでないよ。

俺は何處も何ともないのだからね。只大變に疲勞れて居るだけなんだよ。」

博士の命でシヨウは興奮劑として少量の酒を飲まれた後、デックの胸に犇と抱かれて快くスヤ／＼と眠りました。此度のは生命に益ある好い睡眠で、血の氣の失せた口唇も少しく色附いて參りました。デックは暫時疲れた腕を休めんと、徐かにシヨウに枕させて寢床の上に臥させましたが、自分の留守にシヨウの目醒んを氣遣ひて片時も側を離れずに打守つて居りました。けれどシヨウは數時間安らかに眠つて、次第に生氣を回復して來ました。

私共は賊等の成行に付いては詳細のことは聞及びませんでした。日數経てシヨウは次第に輕快に趣き、今は談話するも差支へのない迄になりましてからは、私共は務めて盜賊一條に付いては避けて話しませんでした。其れは博士からの注意がありましたのです。ローリング博士は恚う言はれました。

「シヨウは此事件の半分しか記憶して居りません。而已ならず其れさへ夢のやうに僅に記憶して居るのですから、全然忘れさせた方が身体の爲に宜いのです。然うすれば自然早く健康も恢復されます。其上で當分母親の許に歸して十分養生させたらなら全然宜くなりませう。で若御宅で二度お使ひなさるなら、今度は此事件に少しの關係もない全く思ひ出させる種のない田舎のお邸の方にお使ひなさるが宜しからうと存じます。」

順てシヨウは健全に復して再び邸に戻つて來ました。此度は給仕を廢めて、抱への園丁の手傳人として嗜好な花木と動物との中に働かせて、而して後年デックが書を

寄せて、彼等の父が幾許かの地面を買ひ、花園を擴げたので、デック一人では手廻り兼ねれば、若格別の差支がなくなればシヨウに暇を賜はり、兄弟共力して、其職業を始めて見度いからそのことを、言越したまで、其處に使つて居りました。

シヨウは其時から實家に歸りましたが、決して私共を忘れません。私共も又シヨウを生涯忘れません。私は毎年自分の誕生日には「謹で目出度今日の日を奉祝す。シエ、コール」と書いた小さな紙片の添へられた立派な美しい薔薇の花束を朝餐の食卓の上に視むるのです。此花束の贈主は美しい仕健な若い市場植木師であることを私は知つて居ります。が私は時折過去つた往昔が追憶されて、其度毎に此美しい花束を贈つて呉れる大きな健かさうな若者の代りに、野生の花の凋れかゝつた塵埃だらけの花束を手にした大きな碧眼の疲れた少年が、其の濫い小さな手を出して、私の面前に參りました當時の姿が顯然と眼に浮んで來るのです。而して低聲に怖るく「夫人、御免なして下さい。俺がシヨウ、コールと申す者なんです。何卒お

シヨウ、ニール

百二十八

邸やしきでお使つかひなして下ください。俺わしは其事そのことで参まゐりましたんです」と言いつた其聲そのこゑ音が今いまも猶なほ耳底みみそこに残のこつて判然はつぜん聞きえるやうに思おもはれますのです。

(終)

明治四十一年十二月廿二日印刷
明治四十一年十二月廿五日發行

シヨウ、ニール
(定價金廿錢)

譯者

丹野 子

發行人

堀田 達治

印刷人

ゼー、エル、カウエン

發行所

東京市銀座四丁目一番地
教文館

印刷所

東京市銀座四丁目一番地
教文館印刷所

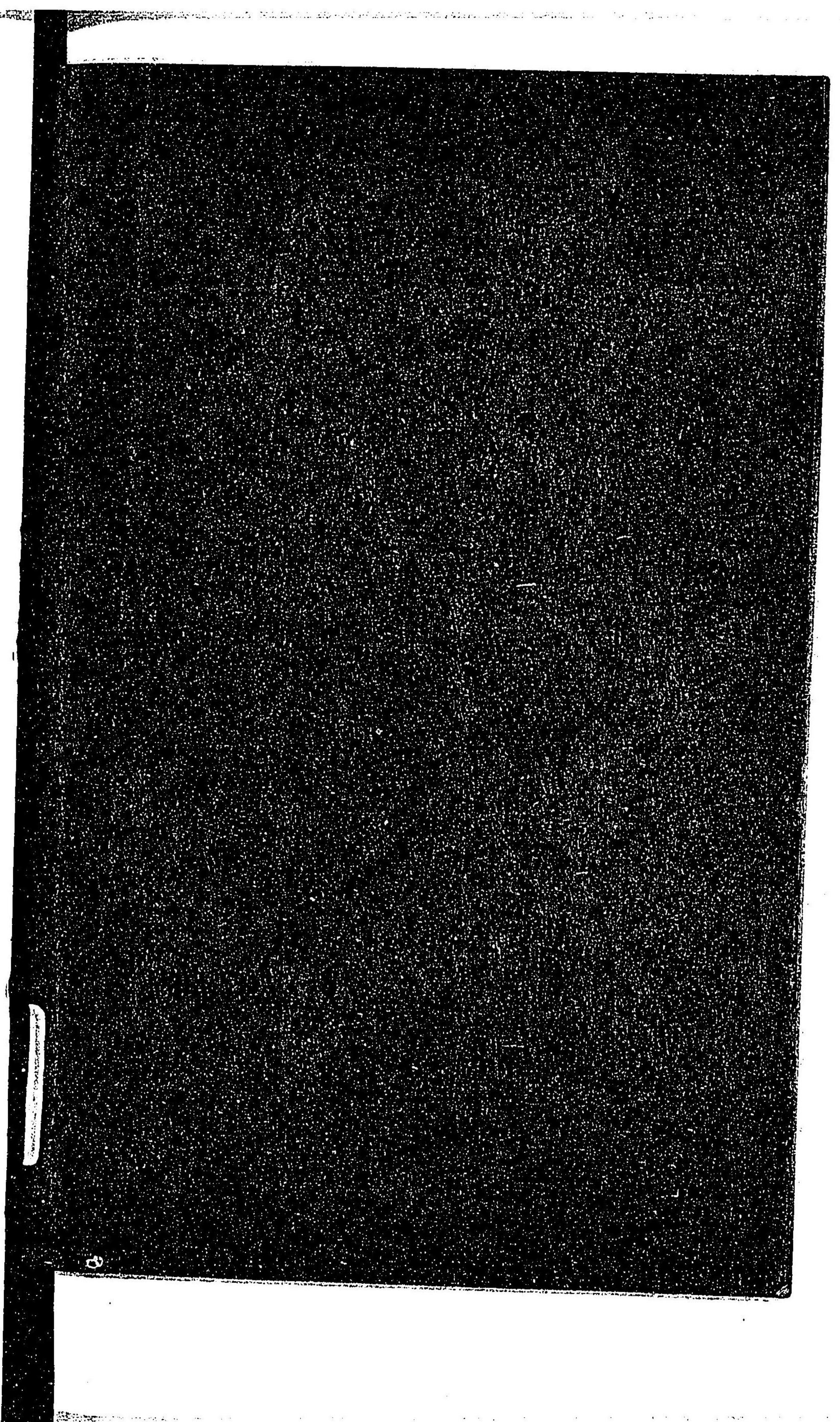


複製 不許

258

3

289



Small, illegible text or markings on the left edge of the dark area.

Small, illegible text or markings at the bottom edge of the dark area.

101065-000-8

特22-474

ジョウ・コールの話

丹野 房子/訳

M41

DBY-0356

